

751  
255

戦争文化叢書  
第二十五輯  
英國の世界統治策

ヨーロッパ問題研究所編



\* 0007157000 \*

0007157-000

751-255-(25)

英國の世界統治策

ヨーロッパ問題研究所・編

ヨーロッパ問題研究所

昭15

ABH



467

751

255

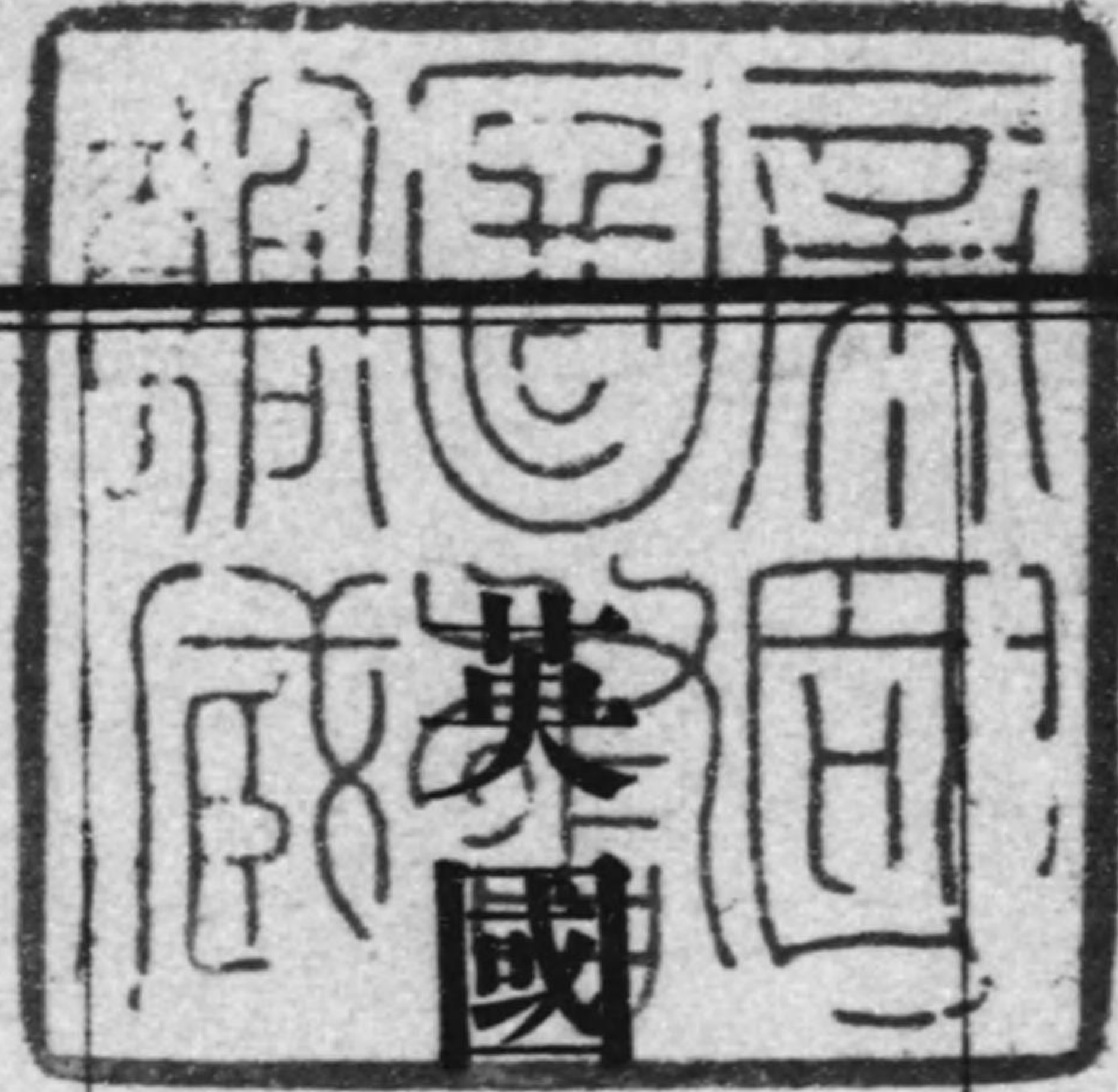
# 策治統界世の國

編所究研題問パツローヨ

書叢化文争戰

輯五十二第





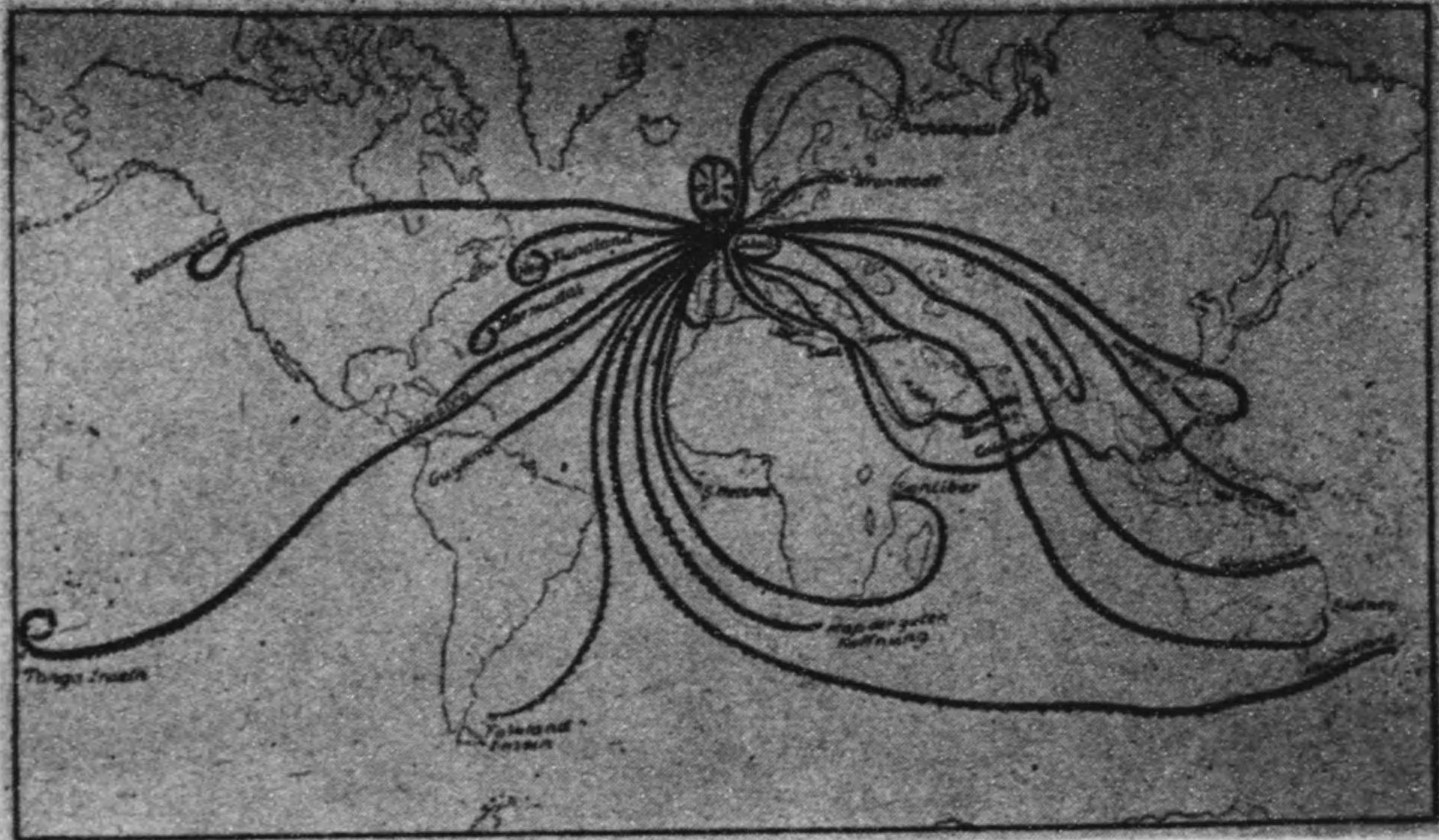
ヨーロッパ問題研究所編

の  
世界統治策

世界創造社版







英國の所謂「公海の自由」三百年

一九一七年に、この諷刺畫の描かれた後英國船の足は  
 更にアフリカ、パレスチナ、トルコへ伸びた。

- |      |             |      |           |
|------|-------------|------|-----------|
| 一六〇九 | バーミューダ諸島    | 一八三三 | ニュージラント   |
| 一六二二 | ニューファウンドラント | 一八三九 | フォークランド諸島 |
| 一六五〇 | セントヘレナ      | 一八四二 | 香港        |
| 一六五二 | ケープタウン(喜望峰) | 一八五四 | アデン       |
| 一六五九 | ジャマイカ       | 一八五九 | クインスラント   |
| 一六九六 | カルカッタ       | 一八七八 | キュプロス島    |
| 一七〇四 | ジブラルタル      | 一八八二 | スエズ       |
| 一七八八 | シドニー        | 一八八四 | ニューギネア    |
| 一七九六 | コロンボ        | 一八九〇 | ザンシバル     |
| 一七九六 | ギヤナ         | 一九〇四 | タンガ諸島     |
| 一八〇〇 | マルタ         | 一九一四 | カレー       |
| 一八一八 | ボンベイ        | 一九一七 | アルハンゲルスク  |
| 一八二四 | シンガポール      | 一九一七 | クロンスタット   |

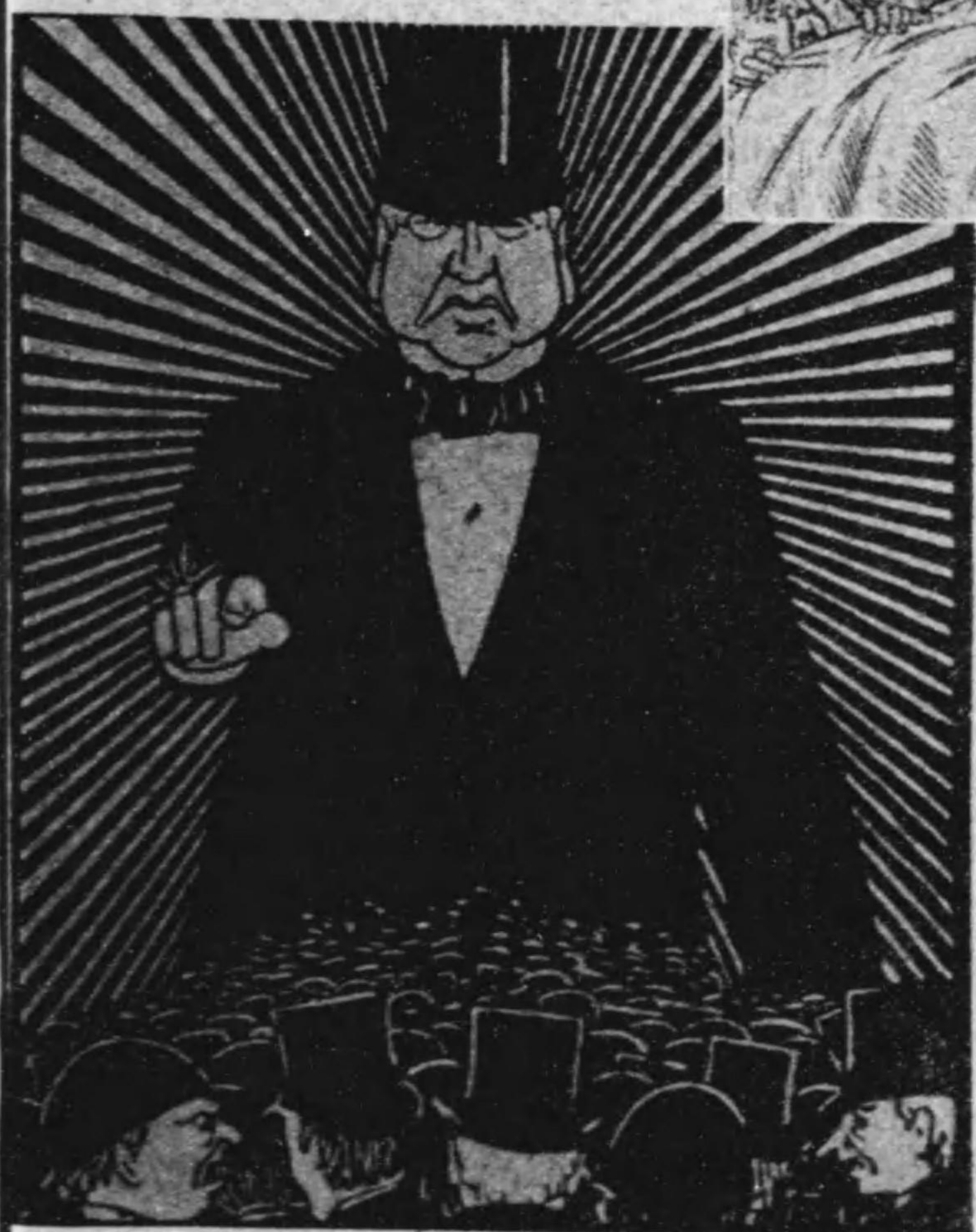




「怪物」

ソールズベリー内閣と其の  
南阿政策を諷刺せる漫画  
英國畫家ジエー・カール  
ター・グルト筆

「威 嚴」  
英誌「PIOK WE UP」所載  
英國の所謂紳士の虚勢偽善を表  
す



ここに收載した諷刺  
畫は、イギリス内部の  
衰れむべき自己批判で  
ある！  
イギリスに於ける  
「良心的なるもの」が  
辛うじて、その表現を  
見出し得た。



南阿戰爭中の英國ヴィクトリア  
女皇とチエムパレン首相とを諷  
せる和蘭漫畫  
「彼女は首相の面前で手を洗ひ  
吾身の潔白を訴ふ」



「交換は竊盜に非ず」  
自らの惡辣なる侵略を諷刺せる英國漫畫





「基督教の現実」  
植民地土着民に對する英國の非人道的虐待振り  
一七九二年英國畫家アール・ニュ  
イトン筆



「英國守備兵英蘭銀行前を行進す」  
一七八七年英國畫家ジェム・ス  
ジレイ氏筆



「切詰め生活」  
一七九〇年の英國漫畫  
佛蘭西人の生活禮讃と英國民の  
泣言口説きとを比較對照したも  
のである。



「エジプトのモーゼか 印度への鐘か」  
一八七五年發行の「PUNCH」より、英國畫家ジョ  
ンテンニエル筆  
デスレリーとスエズ運河問題を諷してゐる。  
デスレリーは英國首相として有名なユダヤ人で、ま  
た「ロード・ビーコンスフィールド」といつた。デス  
レリーは近代英國の帝國主義及び世界制覇慾の權化  
である。デスレリーはロシアを敵とし、またビスマ  
ークの政策と徹底的に闘ひイギリスの世界征覇の道  
を固めた。



「印度の平和の女神デスレリー」  
一八六四年發行の「PUNCH」より  
デスレリーは、また凡ゆる手段  
を講じて印度の征服に力めた。



目次

一 如何にして植民地を獲得したか ..... 一

二 學問思想による戦 ..... 九

三 分割して支配する ..... 三三

四 印度の反抗 ..... 四二

五 西南アジアの反抗 ..... 五五

附記

目次

一



「分け前」

廿世紀初頭に於ける英國の支配者としての諸矛盾とその悲哀を表現する

英國畫家ワルター・クレイン筆

「英國は名譽と正義の爲に印度と闘ふ」

一八五九年發行の「PUNCH」より

印度獨立運動鎮壓に野蠻極まる手段を用ひた事實を暴露する。



# 一 如何にして植民地を獲得したか



近世の世界をイギリスが掌握してゐるといふことは、今や、何人も疑はない事實である。イギリス今日の盛大を招いた所以を知らんと欲するものは、イギリスが如何にして植民地を獲得し、其を如何にして統治してゐるかを考究すべきであらう。イギリスの植民地は世界の各地に跨り、オランダ自由國、ジブラルタル、マルタ、アジアにあつては、アデン、ペリム及び保護領バール、ブルネイ、サラワク、セイロン、キプロス、香港、インド、ビルマ、海峽植民地、マレー聯邦、聯邦外マレー諸國、パレスチナ及びトランスヨルダニア、大洋洲においては、豪洲聯邦、パプア、ニューギニア、西サモア、ナウル、アメリカにあつては、ベルムダ、カナダ、フォークランド及び南ジョルジャ、英領ギアナ如何にして植民地を獲得したか



英領ホンデラス、ニューファウンドランド、及びラブラドル、バハマス、バルバドス、チャマイカ、リーワード諸島、トリニダード、ウリンドワード諸島、アフリカにあつては、ケニア植民地及び保護領、ウガンダ保護領、ザンジバル、モウリシアス及び保護領、ニヤサランド保護領、セントヘレナ及びアッセンション、セイシユルス、ソマリランド保護領、バストランド、ベチユナアランド保護領、南北ローデシア、スワジランド、南阿聯邦、ナイジェリア、ガムビア、黄金海岸及び保護領、シエラレオネ及び保護領、エチプトスーダン、タンガニカ領、南西アフリカ、カメルーン、トーゴランド等がイギリスの統治下に置かれてゐる。以上の中パレスチナ及びトランスヨルダニア、タンガニカ、南西アフリカ、カメルーン、トーゴランド、ニューギニア、西サモア、ナウルは委任統治地、他は植民地である。これを以てみても、近世史がイギリスによつて所有せられ、イギリスの繁榮が植民地搾取の上に築かれてゐる事が明かであらう。ヨーロッパにおいて日本以上の文化的生活を營んでゐる國としては、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ等がある許りで、バルカン諸國の田舎には、立派な近代的道路なきのみならず、電燈さへもみられないといはれてゐる。バルカン諸國が英佛白蘭等のヨーロッパにおける植民地であ

ると云はれる所以も、實にこの様な状態に徴して明かであると思ふ。バルカン諸國を旅行する人が、自動車を持込むと税をとられる。その税は、通過しつゝある當該國の政府に納められるのでなく、或はイギリスに、或はフランスに、或はベルギーに所有せられる有様である。今次の歐洲大戰に際して、宣戦布告後、フランスに於ては、日英米その他二、三の國に屬する國民を除いて旅行者といはず、居住者といはず、即時その場においてフランス政府に徴發せられ、彼らは何れも戦線に送られて、塹壕掘りその他の強制労働に従事せしめられた事實も、バルカン半島諸國民のヨーロッパにおける位置を思はしめるであらう。

大西洋を渡つてアメリカから財寶を齎らすスペイン船を、途中に擁して掠奪する海賊に過ぎなかつた近世初期のイギリスが、次々に世界の諸植民地を獲得する事の出來たのは、イギリスの有する經濟力であつたのか、或は精神力であつたのか。經濟萬能の頭腦をもつてゐる今日の知識人は、そして又イギリスを紳士の國とのみ尊敬してゐる人々は、恐らくイギリスは、秀でた經濟的才能をもつて今日の盛大を齎らしたと考へるであらうが、事實は正にその逆である。イギリスをして近代史の所有者たらしめたのは、イングランド教會の獨立であつて、この事に依つて、イギ

如何にして植民地を獲得したか



リスは近世史構成の主宰者たるの地位を確保したのである。スペインの無敵艦隊を撃破した當時のイギリスの經濟状態は寧ろ危殆の状況になつたと云ふべきである。このような經濟状態を克服して、新しい世界關係の樹立を爲し得たのは、新しき世界觀イングランド教會の獨立と云ふ事によつて表はされるイギリス精神の統一に歸すべきものである。旺盛なる精神力をもつて近世史の創造に一步を進めたイギリスは、アメリカ、カナダ、インド、支那、アフリカ等に次々に進出し、各地に、重要な政略的據點を打ち立て、其の地方の内部攪亂を爲すと共に、イギリス的なる新秩序を新たに構成して行つたのである。時には殘虐極まる殺戮を敢へてし、時には巧妙を極めた懐柔の策を實踐する等多岐多様の政策を以つて、イギリス的秩序は擴大せられたのであつた。

我等は、今日の支那に於て、直接に諸々の政策なるものをみるのであるが、經濟政策に於てはイギリスが斷然他の諸國を壓し、文化工作においては、經濟に於けるイギリスの位置にアメリカが立つてゐる。しかもこのアメリカの文化工作なるものは、アメリカ獨自のものであるといふよりは、嘗てイギリスが諸植民地に對して行つた文化工作の發展的形態であると見做すことが出来る。かくて支那に於ける歐米諸國の諸政策は、イギリスの植民地政策の一つの典型的なるもの

であると思ふべき理由があるであらう。彼等歐米人は支那に對して如何に戦つてゐるか。支那の鐵道に要する資金の大半は外國の投資であり、支那が鐵道を通して國民から徴收する収入は、あげて外國財團乃至は政府に貢がれるのである。海關稅、鹽稅等についても同様の關係が存在する。又鑛山業を始め諸種の企業の本關係においても、歐米の勢力が支那の國民の上に位することが諸々の統計によつて論證し得られる。試みに支那事變の勃發した昭和十二年度の列國對支投資額の百分比をとつてみると、イギリスは五六%を占め、列國の支那政府に對する貸付金のそれは四〇・九を占めてゐる。即ちこの事は支那におけるイギリスの經濟的支配が、如何に壓倒的であるかを示してゐると思ふ。

文化政策については、アメリカが最も大なる事業投資を行ひ、一九三〇年の調査に従へば、英米佛文化事業總財産の中、五七・八%をイギリスが占め、フランスは二九・二%、イギリスは一三%に過ぎない。この投資額は合計七四、四七八、三八九米弗といふ多額に達し、大學、研究所、病院、養老院、義賑救濟會等は、宗教團體の主宰乃至はその協力によつて經營せられ、支那における知識層の歐米化はこの事を通して實現せられてゐる。今歐米の支那に對する歴史を回顧する

如何にして植民地を獲得したか



に、現在行はれつゝある様な紳士的外貌をもつてゐる政策は、此處には見出されない。諸々の植民地に對する白人の侵略史に見られると同じ様な殘虐なる形をもつて支那の上に加へられたのであつた。寛永十四年のジョンウエデルの厦門砲臺の奪取に始まるイギリスの支那侵略こそは、世界の歴史に、白人の汚辱を止めたものといはねばならぬ。支那人がこれに對して反抗し、イギリスが幾度も政府と折衝して此の状況を改善する爲に努力せねばならなかつたことは、イギリス自らの態度の當然の歸結であつた。天保十一年、人間の生命を蝕む阿片を密輸入した自己の悪業を棚に上げて、却つてこれを禁ぜんとする支那官憲の當然の處置を非難し、武力をもつてこの不正不義を押し通し、支那に對して南京條約といふ不平等條約を強要した所謂阿片戰爭をはじめとして、アロー號事件、北京郊外の圓明園焚掠、芝罘條約等に於いて、イギリスの對支政策の暴虐なる本實が暴露せられてゐる様に思ふ。イギリスの植民地政策が時に暴力をもつて遂行せられ、時に懷柔の態度を持したことは、以上述べた如き支那の歴史及び現状について明瞭に云ふ事が出来るであらう。イギリスは西印度諸島のチャマイカの統治に際し、奴隸を使用して、甘蔗栽培事業を行ふたが、その間にあつて、奴隸を酷使した事實は著明なる事である。些少な懈怠に對しても酷

刑を課し、又鎖に縛して死に瀕せしめる事も屢々あり、銃殺、焚殺の如き殘酷なる私刑の如きも公然と行はれた。それが爲に、この地方における奴隸一揆は度々繰返へされ、これの鎮定に當つて行つた殘忍な刑罰に至つては、人々を戰慄せしめるに足るものがあつたと傳へられてゐる。南洋におけるイギリスの據點であるオーストラリアはイギリスの流刑植民地として出發したものであり、一七八七年七百五十七人——内二百人は婦人——の罪囚は、家畜、種子、植物、農具と共に所謂第一艦隊を編成してボタニイ灣に投錨した。これら罪人は移住地においても亦監禁せられたのであるが、刑期の終つた後には、一定の土地、家畜と共に獨立の生活を営み、年々その數二千乃至三千宛を増加したのであつた。斯くの如き有様であつたから、植民初期の濠洲の道德は、類廢を極めたものであり、社會的秩序も著しく紊亂し、その後一八五三年に至つて流刑が廢止せられて以後も、不道德者は容易にそのあとを絶たなかつた。流刑者を移すことを廢止した後の濠洲には、内陸の探検事業、開拓、金鑛の發見、鐵道網の發達、産業の新興等によつて、受刑者に非ざる所謂良民の移住相繼ぎ、今日の如き盛況を齎らし、所謂白濠主義によつて、移民の制限、支那人日本人の排斥等を敢へてなしつゝあるのである。併し元を質せば、右に述べた如く恥づべき

如何にして植民地を獲得したか



行をした人々の受刑の地に過ぎなかつた。而してイギリスの濠洲植民地化の過程において、濠洲の原住民は次々に殺戮せられ、その祖國をイギリスの手に譲らねばならなかつたこのことは、アメリカインディアンの運命と共に洵に悲惨なるものである。然るに、この様な近世史の暗黒の面は、最近に至るまで私達日本人には殆んど知られざるまゝに過ぎ去つた。果して如何なる譯がその間にあるのであらうか。我らは茲に、イギリスの學問による戦が、どのやうに戦はれてゐるかを致へなければならぬ。

## 二 學問思想による戦

日本の近代史は、イギリスが日本に對しても亦、支那に對すると同様の政策をもつて臨み、日本は、政治經濟等、いはゞ形の上に於て、次々にイギリスの謀略の手を反撃し、イギリスに對する最大の強敵として登場し、今や支那の興廢を巡つて兩者の雌雄が決せられんとしてゐることを物語つてゐるが、他面において、日本の思想界學界等が明治四十四年に至るまでの法律的な屈從の間に於いて、——條約改正の實質的效果は明治四十四年に始まる——イギリスの謀略に乗ぜられ、歴史、地理等イギリスを了解する上に役立つ學問の領野に於いては、寧ろイギリスが宣傳するが儘に受け入れて今日に至つてゐるかの如く見える。近世史に於けるイギリスの植民地戦争、被壓迫民族にのぞむ暴虐を極めた態度、世界各地に澎湃として擡頭せる反英戦線の擴大等が覆はれてゐる理由の重要な一つは、右に述べたやうに、學問に於ける對英屈從の實狀を通して生れ



るものであり、今一つは、イギリスが自己の政治的乃至は文化的勢力の擴大に應じて作り上げた國際的通信網の影響によるところ頗る大なるものがあるであらう。昨今ヒットラーとチェンバレンとが、互ひに全く相反する外交政策を世界に向つて宣言し、何れを信すべきかといふ場合に當つて、多くの日本人は、永年馴致せられた教育の結果として、ヒットラーの意見は單なる宣傳に過ぎないと判斷するかの如くみえる。ドイツには宣傳省の組織があり、國立文化院（クルツィア・カンマー）の活潑なる動きがあつて、ナチスの政策とドイツの思想や學問が緊密な關聯を有してゐる事は明かであるが、だからといつて、イギリスの代表者チェンバレンの演説が宣傳で無いといふ理由には毛頭ならぬ筈である。日本の新聞が英米系のニュースを掲載して、常に日本國民の國際狀勢の判斷を指導しつゝある今日としては、ドイツの宣傳は洵に氣の毒な取り扱ひを受けざるを得ないのである。かゝる事情に徴しても、イギリスの通信網掌握が、イギリスの總力戰の上に重要な役割を果しつゝあることを知り得るであらう。聞くところに依れば、ドイツが宣傳戰や植民地工作を遂行するにあたり、國立文化院がその頭腦となり、その指導の下にラジオ映畫新聞記者クラブ等の組織化が行はれてゐる様であるが、他面、嘗てイギリスの勢力治下に

あつた國及び現在なほその状態を脱してゐない國々では、——イギリスの直接の殘虐なる支配を蒙る事なく、イギリスの思想戰を專る恩恵として受取つてゐる我國の如きにあつては——遺憾乍らナチスの宣傳工作は十分の効果を認め得ないやうである。

精銳を誇る武器の偉力を示して、相手國に到底敵對し得ざることを觀念せしめると、これに續いて、優れたる物質的文明を持ち込み、これに附隨して、イギリス風の學問、思想、總括的に云へば、イギリス的教養が巧妙に植を付けられる。精巧なる紡績機械、汽車、汽船、鐵道、港灣、これを運用する諸の技術、このやうな文明を齎すべき政治、即ち議會政治、その理論的基礎となるべき自由主義思想體系、政治學、經濟學、法律學、哲學等々、イギリスの武力に驚嘆し、イギリス的文明に驚異の眼を見張るものには、以上の技術や學問や思想は憧憬の的とならないではやまぬ。これを修得するには、新しい教育の施設——その中の重要な學科目として英語が擧げられてゐる——が要望されるのは極めて自然の成り行きである。修得困難な外國語教授を通して培はれるものは一體何物であつたか。ロンドン是世界第一の都會である。イギリスの學校生活はこのやうに楽しい。街はかくも美しい。イギリスは世界の海上權を掌握し、日没することなき



大帝國である。議會政治は理想的な政治である。紳士の國、これこそイギリスである。かうした簡単な文章が、學習の中に繰り返し繰り返し生徒の腦裡に印象付けられる。學業成績を左右する英語の先生は、最も尊敬せられ怖れられ何時とはなしに、一番教養ある人物の如く見做される。優秀な生徒が例外なしに英語が巧いと云ふ事實は、英語の巧いものが優秀なものだと云ふ錯覺を生む。尊敬すべき英語の教師や優等生でさへも、自由に驅使し得ない英語を、自由に喋るイギリス人までが、優秀な人種と考へられるのは、洵に陥りがちな錯覺である。

更にかゝる拜英思想を助長するものは、イギリスに遊學又は旅行したものの言動であらう。彼等は多くは、國內の上流者若しくは學界や政界に將來を約束されてゐる人達であるから、彼等がイギリス本國の繁榮——植民地搾取上のに樹てられた繁榮——を目撃して、その優れたる有様を歸國の後に鼓吹宣傳すれば、そのもつ影響は頗る大きい事は言ふまでもない。多年の外地統治に馴れたイギリスが、このやうな傾向を有効に利用しないとは考へ得ないであらう。英語教育、イギリス文化の見聞、これに成功すれば、學問内容による恒久的な戦は更に容易である。法律學、經濟學、政治學等が直ちにこれに動員されることは見易き道理であるから、こゝには改めて、そ

の實例を記述するを要しないであらう。比較的看過され勝ちの歴史教育、歴史學、地理教育、地理學に就いて、イギリスが如何に戦つてゐるか、二三の例によつて、その實情を明かにし、これによつて、イギリスの真相が覆はれつゝある事實を指摘して見よう。

明治維新後、日本の歴史研究の方向がイギリスの手になる歴史研究を模範と仰いで生れた事を擧げなければならぬ。スペンサー、バツクルわけてもバツクルの「英國文明史」は、明治時代の新進の學徒の心を捉へ、新たに書き改める學問的の日本歴史の原型は多くこれにその範をもとめた様である。明治二十年代に我國に於ける科學的歴史研究の基礎が置かれたのであるが、その基礎をおいた東大の外人教授リース博士はランケの弟子であり乍ら、イギリスの議會史を專攻した學者であつて、この人によつて日本は高邁なるランケの史學を繼承する代りに換骨奪胎された實證主義史學をもたされたのであつた。これに相呼應するものとして、さきに述べた英語教育の普及徹底があり、西洋史研究や西洋史教育の如きは、専らイギリスによつて編輯せられた資料集乃至は著述に負ふに至つた。主體をイギリスに置いた世界史が、國民の世界觀を左右した事は洵に戰慄に値するものであると云はねばならぬ。東洋史の如きもフランスやロシアやイギリスの研究に至



められて、眞實の東洋の文化は近世ヨーロッパ文明なる妖雲の下に被はれ、ヨーロッパを美しく、アジアは陰惨に、日本の文化は矮小に印象づけられたのであつた。明るい西洋史、暗い東洋史、興味なき日本史。これらが各層の學校教育を通して、或は出版物を通じて、繰返し國民の腦裡に印象づけられたのである。匈奴の輝しい世界史における業績や成吉思汗の逞しい世界制覇の歴史、或は又マホメットの運動は、殘虐なる無智蒙昧なアジア人の侵略的行爲として説かれ、ヨーロッパのアジア侵略、植民地戦争等は、原住民の蒙昧さ攘夷觀念或は頑固さの酬いの如く説明されてゐる。阿片戦争、アロー號事件等は、支那側の不法によつて惹起されたものと教へられ、各植民地における殘虐なる行爲の一切は、歴史の表面から影を没してゐる。この様な、偽瞞の半面に、強く美しく描き出されたギリシヤ以來の西洋文明！その文明を擔ふヨーロッパ人がどうして世界の有色人種に對して殘虐なる行爲をすると考へる事が出来るであらうか。別けてもその中心なる、紳士の國イギリス人の云ふ事に間違ひがあらう等と如何して考へる事が出来るか。自由主義諸國家が獨伊を侵略國と呼び、我が皇國を全體主義國家の中に含めて其を惡し様に罵るのに對して反駁するものゝ出現を期待するのは無理であらう。イギリスの宣傳を正當視し、イギリ

スの全體主義批判に賛意を表する者の多いのは、日本の近代史を省る時當然の歸結であることさへも云へるかも知れない。

以上は歴史研究及び歴史學におけるイギリスの政策であるが、同様の事は地理學の研究と地理教育に就ても考へる事が出来るであらう。或る新進地理學者の研究は、次のやうな判斷を生んでゐる。イギリスの近世史所有と相應する問題として何人も直ちに氣のつくことは、世界の子午線の起點が、イギリスのグリニッチ天文臺であるといふ事實であらう。これは明治十七年ワシントンに於いて開催された萬國測地會議に於て決定せられたのであつて、萬國等しくイギリスの世界制覇を承認した事實を物語るものである。イギリスの手になる世界地圖に就いて考察するに、小國の群立を表はし、イギリスの政治的支配圏の廣大さを明示した政治地圖を諸外國に輸出して、世界におけるイギリスの勢力を確認せしめる如き教育を施して居る事も改めて吟味を要する問題であらう。嘗てのシヤム國今日の泰國は、棉花甘蔗ゴム等を多く産する農業の國であるが、この泰國を巡る諸地方にイギリスの支配力が及ぶと、此處に米作を採用せしめてイギリスの勢力圏に不足してゐる食物の補給をせしめんとする要求が生まれ、地理學的觀點にたつて、泰國が米作に



適當してゐる事を力説したと云はれてゐる。古來の日本の文化圏、將來の發展の地盤として、注目を惹いてゐる南洋は、非常に物資に恵まれた地點であるが、從來イギリス及びオランダの支配下に屬してゐるために、その豊かな資源は被ひかくされてゐるかの様にみえる。日本の武力戰遂行の爲めに不可缺の物資として屑鐵と石油とは現在アメリカより輸入してゐるが、その中石油の如きは實は南洋においてこれを求める事の出来るのである。かくの如く、イギリスは學術を利用して南洋の資源その他いやくも敵國に有利なりと思惟される一切の事は隠蔽してゐるが、皇戰の進展に伴つてその内容が逐次我が國に判明しつゝある。ニューギニアの如きも、かつて瘴癘蕃雨の國食人の國として宣傳せられてゐたが、それが世界に類例なき豐饒な地方であることが知られて來た。從來の地理學において重要資源といはれてゐるものは、既成の生産設備をもつて處理するに適した原料資源をいふのであるが、少くとも今日のところでは、日本の學者の多くはこの規準において資源を考へるやうに馴致されてゐる。その結果はどうであらうか。日本の資源や東亞地帯に於ける資源は甚だしく嬌小なるものと觀念する他はない。物動計畫をなすに當つても、我國を甚だしく貧困なるものとの前提の下に立案が進められ、遂には戰爭遂行不可能が結論され

るのである。洵に巧妙なる戰ではないか。先のイギリスの政治的勢力の優越性を地圖によつて表はす戰術は、イギリスの支配下に屬する地域の面積を事實よりも大きく印象づける事を必要とし、その爲にメルカトルの投影法を用ひ、高緯度に多く所在してゐるイギリスの支配權を、他との比例において、著しく大ならしめる効果を狙つてゐると共に、今日以後警戒を要する事柄であると思ふ。メルカトル地圖法によつて表はされたカナダ、濠洲、南阿、ニュージールランド、イギリス本土等は事實よりも遙かに大きい。そのやうに、イギリスの勢力は事實よりも強大に宣傳されてゐるのである。イギリスのパーソロミュ編のタイムス地圖帖は、メルカトル投影法以外の圖法をもつて描圖せられた世界圖を一枚も挿入してないのである。一八八六年ロンドンに設立せられた國際統計協會も、以上と同様に地理學による總力戰の一例として考察すべきものであらう。八十餘年の歴史をもつイギリスの「ステーツマン統計年鑑」は、今日では、世界における年鑑類の中基本たるべき原型と目せられ、甚だその統計は各種の年鑑に、採用せられてゐるのであるが、この統計によつて、イギリスの勢力は、必要に應じて強大なるものとされ、或場合には、數を減じてゐるのみである。今日の實證主義的學問研究にあつては、數字や統計といふものが、非



常に重要な意味を認められてゐるから、これをみる人達は、假令揚げられた數字が如何に事實を歪曲したものであつても、數字の擧げられるといふその事によつて、事實を判断し去る場合が頗る多いのである。長い歴史と傳統に權威づけられた國際統計協會が、世界の舊秩序を確保せんとする諸國の人々によつて組織され、若しくは使用せられる場合には、如何なる詐術をもなす事が出来る筈である。イギリスの他の學術を通しての戰略に徴して考る時、數字や統計ばかりが、眞實を語つてゐると判定する事は寧ろ甚だしく滑稽な事であると云はねばならない。又地圖の上において距離を測定する時に、陸も海も同一の梯尺をもつてする事は不當である。即ち海上における輸送は陸上のそれに比して二、三十倍の能率を發揮し得るのであつて、海上の距離といふものは、實質的には、從來地圖の上で示された距離の二、三十分の一のものとみるべきである。有利な海上交通の覇を制し、ジブラルタル、マルタ、スエズ、アデン、コロombo、シンガポール、ケープタウン、その他海上における要衝の大部分を扼してゐるイギリスは、自らはこの海のもつ特性を十二分に享受し乍ら、他の國に對しては此の思想を知る能はざらしめてゐるのである。地圖のもつ戰術は數へ立てれば更に數多發見されるであらう。かくの如き地理を通しての戦ひは、地

理辭典や大英百科辭典の編纂等と同様、イギリスの植民地獲得戰爭と植民地所有との尊い體驗に基いて樹立されたものと云ふべきである。即ち民族學、地理學の研究が國家の支援を受けてゐることを、われらは、茲に注目しなければならない。

言語學、人類學、考古學、動植物學等がイギリスの植民地政策と深い脈絡を有することは既に多くの人々の注意にのぼつてゐる通りで、民族學におけるエジンバラ大學、英國王室地理學協會その他諸學術團體から各地に派遣せられる調査探検隊、各地に高大なる機構と美觀とを誇る大學研究所、圖書館、博物館、現地の政治機關、教育機關、教會等は、一聯のイギリス總力戰體制を形成し、イギリスの植民地政策に對して、貴重な資料を提供する。植民地統治のために「分裂して支配する」巧妙なる政策も、實は此の研究に負ふところ大なるものがあるのである。

嚮に現代支那に於て此等の事實を指摘したのであるが、同様の事は、今日のアフリカに於ても明瞭に看取し得るのである。「アフリカに於て黒人はその最高の職業を自動車運轉手に限定せられ、物品として使用され時に又愛撫せられる。」といはれてゐるが、そのことは本國の政策と緊密に結びつけられ、計畫的に企てられてゐるに相違ない。奴隸海岸といはれてゐるナイヂェリアでは、



南部植民地に官立學校四十九、補助金支給學校二百二十六、私立學校二千三百五十三、北部植民地に官立九十六、教會立並に私立百五十九、マホメット學校三萬一千ありとせられてゐるが、これらの學校に於ける教育は、アフリカ人のアフリカ建設のためのものではなく、何れも、イギリスのアフリカ建設に都合のよいものであることは疑ふべくもない。西アフリカの黄金海岸のプリンス・オヴ・ウェルス大學と相並ぶ黒人最高學府キングスカレッジとクインスカレッジといふ日本の學習院にも相當する學校では、酋長の子弟がイギリスの支配に恰度適當な限度の教育を授けられてゐると、「喜望峰に立つ」の著者は物語つてゐる。幼稚園や小學校女學校等において、歐洲文化を中心として生物學や人類史を標本をもつて強引に教へこみ、而る後これらの大學校に入學せしめ、その卒業生の一割はケンブリッジ大學に入學を許可されるのである。西アフリカの最も教育組織の完備した所といはれてゐる黄金海岸にあつては、師範教育、圖書館、アフリカに關する文献の蒐集、巨大なる植物園の施設等がみられるが、これらも先にその設立の本旨を指摘した大學その他と同様に、アフリカ自體の文化を啓發しアフリカ人のアフリカを建設するための機關であるとは見做す事が出来ないのである。以上、二三の例を以て説明したやうに、イギリスの統

治政策は極めて多角的なるものであつて、植民地化せんと欲する或地方に據點をもつと、その地方に有能な政治家、商人、學者を動員し、彼等は本國と緊密な連絡をとり、その地方々々の歴史、地理、土俗、言語、經濟生活、社會制度等を詳細に調査研究し、出版機關、報道機關等を利用してその成果を互ひに交換し、本國政府に於いては、その地方を如何に統治するか、の具體案が樹てられる。その具體案が實行に移される道程に於て、更に精密な、從てより具體的な研究が生れ、次の政策の準備が整へられて行く。大學、圖書館、博物館その他一切の文化施設は銀行、會社、鐵道港灣等とは一應は別途の役割を果しつゝあるかの如くみえるが、本國政府の政策樹立の際には、それだけに却つて有効なる役割を果すのである。所謂文化諸施設がイギリスの總力戰遂行上の貴重なる位置を占める所以は如上の諸例によつて明かであらう。これらの種々の機關を通してイギリスは如何なる統治の政策を樹立したであらうか。その最も典型的且つ具體的な方法は「分割して支配する」(Divide et impera) といふ政策に外ならぬ。



### 三 分割して支配する

分割支配の政策は、イギリスの老獪なる政治工作として、全世界の諸被壓迫民族の間に盛んにその非を喧傳せられてゐる。といふのは、この政策がイギリスの植民地獲得戦争、植民地統治、諸外國との外交等において、驚くべき効果を挙げたからである。かのフランス革命に際して、イギリスが有効なる手段を講じてフランス國內輿論の分裂に導き、その間對佛植民地戦争に完全なる勝利を博した事は史上に名高き所であり、昨今、日本に於て、イギリス情報官が種々の手段を弄して、國內における輿論の對立を招来しつゝあるのも、この政策の切實なる一例であると云へるであらう。日本や支那等東亞に於けるイギリスの政策の批判は、直接日本國內の政治問題に關聯する故、例を印度やパレスチナや、アイルランドに求めて、この政策の本質とその運命とを具體的に闡明しよう。英國の世界統治策の最も典型的なる技法は、その統治せんとする國內に黨派を

生ぜしめ、これらの相互の分裂を利用して自己の統治を全うする所謂「分割して支配する」技法であり、その實例は、印度政策において、もつとも明瞭に看取されるであらう。印度における異民族間に惹起する凡ゆる矛盾衝突は、印度民族の多種多様性と混淆との齎すところであつて、印度人自身が自治の能力に缺けてゐる事を示すものであるとイギリスは宣傳し、かくのごとき混亂を收拾統一することがイギリスに課せられた任務であると云つてゐる。併し乍ら、事實に於て印度は嘗て幾度か政治的統一を全うし、盛大なる印度文化を世界に輝かしたのであつて、今日の如き分裂と抗争の悲惨な歴史は、寧ろイギリスの印度統治以後においてみられる現象である事を思はなければならぬ。一九一六年以來、從來激しい反目の中に過してきた印度の二大宗派なるヒンヅ教徒とマホメット教徒が協同戦線を形成したのであるが、この傾向の裏面には、茲に説かんとする「分割して支配する」政策が看取せられるのである。イギリスは印度の統治にあたり、マホメット教徒を公然優遇し、選挙に際しても、宗教自治の原則に従つて、州會議員のための宗教團體を組織する事によつてマホメット教徒に優位を與へんと努めたのであつた。イギリス印度軍の内部においても、マホメット教徒は、土民に對する指導的な役割を演じてゐる。即ちイギリスが



印度人に士官の地位を與へるのは、殆んど例外なくイスラム教徒に對してであつた。第一次歐洲大戰以前にイギリスインド軍は、七萬六千のイギリス人の外に、十六萬のインド軍を擁してゐたが、その大半はマホメット教徒よりなつてゐた。インド民族の混亂に處するに當つて、イギリスは常にマホメット教徒、就中マホメット教を信する貴族を支持し、これを頼りとしてゐた。しかもこれらの貴族は、經濟的にはインドにおける最も無能なる階級に屬するのであつた。絶えずその没落を嘆きつゝ生活をしてゐたに過ぎなかつた。彼等にとつては、イギリスの支持を得て兵役に服するといふ事は最も合理的にして、且つ高尚なる前途を約束されるものと云ふべく、彼らはかくの如くして軍隊内における最も強い騎士となり、最も精銳なる士民士官ともなつたのである。このマホメット教徒種族に對立する文士達では、イギリスに對して非常なる憎惡を抱くと共に、マホメット貴族を宿敵としてきたのであつた。文學的乃至は藝術的教養をもたざるマホメット教徒の貴族は、文士達の教養を蔑視してゐるが、その實、英領インドのある高官が主張してゐる通り、貴族達の多くの者は、不精で肉感的で浮薄であり、無能貴族の惡徳と地主豪族の徳とを合せもつてゐる。このやうな貴族に對して、イギリスが歡心をかゝつ

とめ、且つそれによつて、彼ら貴族が如何に官位が高くあらうとも、印度國民は誰一人としてこれを顧みるに至らざるは見やすき道理である。されば、「分割して支配せよ」の政策が破綻を生ずるのは、寧ろ當然の歸結と云はねばならない。然らば何時の頃において、この政策の逆効果が現はれはじめたのであらうか。

一九〇五年にイギリスはベンガル地力を二分せよとの命令を發し、この分割によつて、インドの國民運動に對して決定的打撃を與へん事を欲したのであるが、その結果は、正にイギリスの欲するとは反對のものとなりつゝあるのである。ベンガル地方及び北高インドの重要都邑において、——アラハバートよりアムリトザルに至る迄の間に——インデアン・アソシエーションの分派が創設され、外國の支配下に喘ぎ、屈辱の慘狀から脱却しようとするインド民族の叫びが漸く政治的組織を形成せんとするに至つた。これより先一八七四年、ベンガル地方分割が行はれ、アッサム地方はベンガル地方より分離され、イギリスの支配に好都合の狀況を齎したが、この分割に際しても住民は、非常なる抗議を申し出たのであつた。併しイギリスはこれら住民の抗議を一蹴し去り、更に東部ベンガルと西部ベンガルとを、同様にして二つの州に分立せしめたと云



はれてゐる。

かくて、一九〇五年のベンガル地方の分割が、國民の間に憤激の嵐を捲き起した事は、極めて當然の歸結であつた。一九〇五年十月十六日こそは、この分割が實施せられた印度國民にとつての悲しむべき記念日であると云ふので、この日をもつて全ベンガル地方における國民的服喪の日と定むべしとの指令が隨所に發せられた。又ベルガル地方の住民たちは、ラキ・バンダンと稱する赤い徽章を作り、同志の結束の象徴としてこれを手頸にまきつける事としたのであつた。既に一九〇五年の八月七日には、分割に抗議するための國民大會がカルカッタ市廳において開催され、數萬に達する全ベンガル地方出身のヒンヅー教徒の有識者達がこの大會に参加し、次の如き決議をなした。「この抗議を無視して、若し分割の實施された曉には、我等はイギリスの物貨を購入しない。但しベンガル分割の命令が施行せられざること、即ちかゝる命令が撤回されることをイギリスが確約する場合には、イギリスの物貨を購入するであらう。」

以上がその決議の内容であり、ヒンヅー教徒はこの制約の下に、自らのその後の行動を律したのである。此の抗議を無視するカルゾン卿が一九〇五年十月十六日にアツサムの分割を斷行した

際のカルカッタ市は、洵に前代未聞の光景を呈した。ヒンヅー教徒の商人たちは、その店舗を悉く閉ぢ、全市の營業は全く停止の状況に陥り、ヒンヅー教徒の家からの炊煙は、一つとして立ち上らず、彼等は何れも喪服を着用したのである。喪章を附した幾萬といふ人々が嚴肅な面持で跣のまゝ街頭を練り歩き、彼等は道ゆく人々に對して、それがヒンヅー教徒たると回教徒たるとを問はず、又ベルガル地方の人であらうと他民族であらうとを問はず、將又印度人たるや外國人たるやをも區別せず、その手頸に赤い徽章を巻きつけて行つた。このやうにして、全市の二十四ヶ所において、分割反對の大會が開催せられ民族の苦惱を吐露する愛國の熱情は、次第に國民上下の間に滲透して行つたのである。

イギリス人達は、ベンガル地方分割に對する印度國民の憤激によつて、歴史的に久しく對立状況におかれてゐたヒンヅー教徒とマホメット教徒との大同團結が結成され様などは、夢にも思はなかつたやうである。善惡の如何を問はず、運命を共にするといふ誓約の下に、兩教徒の提携が出来上つたといふことは、イギリスに取つては、豫期しない出來事であり、インドの將來に對しては一道の光明であるといへよう。

分割して支配する



分割反對大會の散會後、幾萬とも知れぬ群集が、諛をする爲に、ガンガ河へ向つて嚴肅な行列のまゝ下つて行き、彼等の高唱するバンド・マタラム(祖國萬歳)といふ熱烈な叫びが、周圍を壓したのであつた。群集は此の地方の分割が舊態に復歸する迄は、十月十六日を服喪の記念日と定むべき旨を誓約すると共に、バンド・マタラムの叫びを神聖視すべしといふ決意を堅うしたと傳へられてゐる。

此の運動は、始めはベンガル地方に限られてゐたが、間もなくインドの他の地方迄も波及し、右に述べたカルカッタの運動と同様のものは他の諸市に於ても繰返へされ、ヒンヅー教徒とマホメット教徒との接近がその間いよゝ深められたやうである。即ち兩者は官憲によつても又其他の何人によつても、二度と再び反目する様に使喚せられざる可きことを誓ひ、この運動は時と共に擴大の傾向を辿つたのである。事態はかくの如く進展したので、イギリス本國に於ても、この眞相は次第に世人の噂に上らざるを得なかつた。即ち、ベンガル地方のヒンヅー教徒達は、マンチエスターにある商業會議所へ、その嘆願書を携へて挨拶こんで來た。嘆願書には、此の運動の力に鑑み、ベンガル地方の分割案撤回をなしとげるやう取計らうべきことを求めてあつた。併し、

乍ら、商業會議所では、此要求を全面的に拒否したのみならず、ベンガル地方に於ける反英運動はいはれ無きものであると云ふ意味を仄めかしたのである。かくて、此由を傳へ聞いたベンガル地方にあつては、より激しい英貨ボイコットの運動が隨所に行はれ、カルカッタのカリハット寺院に於て、數萬の群集が先に掲げた如きの誓約を行つたのである。以上はベンガル人達が其祖國愛に基いて、自國の分割に對して死の闘ひを續けつゝある事實と、イギリスの傳統的政策とも云ふ可き分割して支配する政策との關係を明かに示す一例であるが、此様な出來事は、必ずしもこの事件のみに限られたことではなく、かの有名なるシュレスウィヒ・ホルシュタイン事件も亦同様の關係を示して居ると思ふ。

次で十月十六日には、カルカッタに於けると同様の分割反對大會が、ベンガル地方の各市町村に舉行せられ、英國の織物のボイコットが決議せられた。最初の間は、イギリスの重壓によつて、斯くの如きボイコットは直ちに彈壓されるものと信ぜられて居たが、間もなくイギリス側の期待する如くに簡單に解決を齎らし得るもので無い事が明瞭となつた。周章狼狽したイギリスは、峻烈を極めた彈壓の手を加へたのであるが、事態は却つて惡化する許りである。即ちベンガルの



分割反對の運動は、全インド人の團結へと進展したからである。更にいへば、インド國民の國民的統一を目標とする祕密結社が此の機會に於て嘗てなき勢力を擴大したのであつた。

かくて、六年後に於ては、イギリスは此分割を事實上撤回せざるを得なくなつた。のみならずポイコットに依るイギリスとの通商の障害、祕密結社の活動、暗殺の陰謀、その他憂慮す可き事件が瀕々として惹起せられ、鐵腕をもつてベンガル地方の分割を遂行せんとしたクルゼン卿は、此事態に當面して、その責任を感じ、遂に本國へ歸還すべきことを申出るに至つたのである。

インドに於けると同様の「分割して支配する」といふイギリスの政策は、更にアイルランドに於けるイギリスの國家政策にも見出される。アイルランドの場合は、新教を奉ずるイギリス人達を、カトリック教會の敵たらしめたのみならず、アイルランド國民の大多數に對する敵ともしたのである。此地の新教徒達は、最近の數世紀間に、英本國からアイルランドへ移住してアイルランド北部に定住し、此地方を獨占したのである。元來アイルランド人は、頑迷な英國人達を自分の味方とする丈の魅力をさへも有つ愛すべき國民であり、イギリスの政策次第ではイギリスに反抗するやうな國民ではなかつたが、陰險なる「分割支配」の政策の犠牲となつて、今では、叛逆者の

レッテルをはられて了つたのである。グラッドストーン時代の下院に於けるアイルランド野黨の總裁として有名であり純粹のイギリス人の血統を引く新教徒の貴族社會の一員であつたバーネルが、嘗て壓政下に喘ぐアイルランド人の權利を擁護する人として立つた事蹟は、アイルランド人が元來如何に善良で愛すべき性格をもつてゐたかを説明してゐると思ふ。かやうな性格のアイルランド人が何故イギリスに反抗したか。われらはイギリスの「分割して支配する」政策の今一つの例を茲にも見出すのである。一六四一年の回教徒反亂以後、イギリスの舊教徒に對する彈壓は激烈を加へ、北アイルランドの小國アルスターの新教徒には特別の優遇をなして、新舊兩教徒の對立を激化し、アイルランドの合併運動を妨害したからである。一九二二年アスキス内閣は自治法案を提出し、歐洲大戰中一九一六年より一九二二年に互つては武装蜂起相次ぎ、次に一九二〇年英國議會はアイルランド自由國の成立を許したが、「分割して支配する」政策は依然續行せられ、北アイルランドを六行政区、南アイルランドを二十六行政区に分割し、南北分離の傾向を助長してゐる。

一九三七年七月の人民投票によつて制定された新憲法には、

分割して支配する



一、アイルランド自由國をニア (Eire) と改稱す。

一、英國王の代表者たる總督を廢止し、アン・トアチタランと呼ぶ大統領を置く。アン・トアチタランは執行權を有し、又國會に對して法案の拒否權を有す。

一、國務會議は、アン・トアチタランを輔佐す。

一、下院は立法權を有す。

一、昨年廢止された上院に代はり、廣汎な職能を代表する新上院をおく。

と見えてゐるが、それによつては、眞の南北統一と、アイルランドの獨立とは成立しなかつた。久しきに亙る反英の民衆的感情は、一九三七年七月二十八日、イギリス新皇帝ジョージ六世が皇后を伴つて國內巡遊の途次、北アイルランドのベルファストに到着した時に又も破裂した。南北國境附近に於ける鐵橋爆破、ベルファスト郊外のガスタンク爆發事件が即ちそれであつて、ために皇帝夫妻は、アイルランド巡遊を斷念することを餘儀なくされた。祕密警察隊の組織する強力なる軍隊も、この暴徒の一部を鎮定したのみ、如何ともする能はなかつたのである。アイルランド人の憤激の凝つて出來上つてゐた非合法的組織たるアイルランド共和軍は、その後も隠然たる勢

力を示し、同年十一月十一日の休戰記念日には、アイルランド中央電信局、土木局屋上に爆彈を仕掛け、英皇室の紋章を木葉微塵に粉碎し去つた。かくの如き物情騒然たる中に、十二月十四日首相デ・ヴァレラは、イギリス本國の意志を默殺して、イタリアのエチオピア併合を承認し、且つ、フランコ軍とも絶えず接觸を保ちつゝあることを聲明するに至つた。

一九三八年四月に成立した英愛協定には、

一、英國は無條件で、アイルランド國內駐屯兵を撤收し、沿岸防備權をアイルランドに移讓する。

二、アイルランド政府は英國政府に對し、來る十一月三十日まで一千万ポンドを支拂ひ、これによつて兩國政府の經濟的支拂要求の總てを帳消しとする。

三、一九二五年英愛協定に基き、アイルランド政府は英國政府に對し二十五萬ポンドの支拂を續行する。

四、英愛兩國政府は、相互の報復關稅を悉く廢止する。

五、通商協定の有効期間は、三ヶ年とし、この期間は、アイルランド政府は現在無稅に輸入さ

分割して支配する



れてゐる英國貨物の無税輸入を保障する。

と見えてゐるが、南北アイルランド合併は除外されてゐる。イギリス首相チェンバレンは、北アイルランドに於ける總選挙に際して、合併反対の「統一黨」が勝利を得たことを理由として、巧みに、南北合併問題を除外したのであつた。されば、エア共和国とアルスターとの對立は依然解決を見ず、従つて、エア共和国の反英運動も少しも下火とはなつてゐない。本年二月上旬の電報にはアイルランドの反英運動熾烈化の兆ありとて、次の如き事件を報じてゐる。

昨秋以來ロンドンその他の各地に爆發事件を起し、死者五名を出したアイルランド共和軍(IR A)に屬するテロ一派の中、バインズ、リチャーズ兩名に對し、エア側では、死刑執行猶豫が嘆願せられてゐたところ、その要求は容れられず、二月七日遂に處刑せられるに至つたので、エア國民のイギリス本國に對する感情は極度の悪化を示し、七日夜には、エア全國に互つて、各所に反英示威運動が行はれた。この反英示威は、從來會て見なかつた程の大規模を以て行はれ、全國主要都市の劇場映畫館等も一齊に閉鎖され、各種の催物も、市民の反英示威運動参加のため延期される有様であつた。一方エア國內のイギリス政府所屬の各建物は、興奮したエア市民の暴行を阻止

するため、官憲によつて嚴重に警護されるなど、物々しい情景を呈してゐるさうである。

尙イギリスの嚴重な非常警戒網をくゞつてロンドンに潜入し、イギリス官憲の手に逮捕された一エア共和軍員を取調べたところ、前記兩人の死刑に對して報復するための暴動計畫明細書が發見された。右は九日のデーリー・メール紙が、エア共和軍が近く戰時會議を開催し、イギリスに對し報復的テロ行爲を展開すべく、その範圍も皆に北アイルランドのみに止まらず、イギリスその他の地方にも及ばしめんと計畫してゐる、と報道したのと相應するものであつて、イギリスの神經をいたく刺戟してゐるやうである。

イギリスが「分割して支配する」政策を實行するに際して好都合なる地盤をなしてゐるアイルランドの新舊兩教徒の数は次の通りである。

エ ア

カトリック	二、七五一、二六九
プロテスタント	一六四、二一五
長老教會	三二、四二九
分割して支配する	三五



英國の世界統治策

三六

メソヂスト

一〇、六六五

その他

一三、四一六

アルスター

カトリック

四二〇、四二八

プロテスタント

三九三、三七四

長老教會

三三八、七二四

メソヂスト

四九、五五四

その他

五四、四八一

次にイギリスの「分割して支配する」政策の顯著な實例として、最近數ヶ年におけるパレスチナの事情を簡単に述べて見よう。イギリスは、パレスチナを猶太人の永住の地と約したのであるが、此の地方には、以前よりアラビア人が數多居住し、猶太人とアラビア人とが相互に和解する様な工作がイギリスに依つて講ぜられなかつたために、兩者の對立が尖鋭化し、不幸なる事態は相次いで惹起せられた。イギリスが兩者の和解に努力しなかつたのでは無く、寧ろその本心は、

兩者の對立を誘導するにあつたことは恰かもインドに於けるマホメット教徒とヒンヅー教徒に對する施策とその歸を一つにするといふべきである。英領インド及びパレスチナに於ける住民の相互對立を通して、イギリスの統治が、愈々確保せられるものとなし、イギリスが此狀況を眺めて北叟笑んでゐると論斷すべきであらう。イギリスはパレスチナを東インド若しくは濠洲へ赴くメーソールの一據點に化さうとするものであるから、パレスチナに於てアラビア人と猶太人とが對立するのは、イギリスの國家政策としては決して不愉快な出來事では無い。否この争亂を利用してパレスチナを自國軍隊の根據地として確保せんとするイギリスにとつては、兩者の争は寧ろ歓迎すべきものと見做されたのである。一九三七年猶太人居住に對するアラビア人の敵對行為が遂に暴動化するや、イギリスはこれを制壓するために、或種の改革をなさんとする意志を表明するに至つたが、蓋を開けると、又しても「分割支配」の政策であつた。即ちパレスチナを二つ乃至三つの區域に分割するのが、この改革の主要なる内容をなして居つた。分割の方法はスイスの先例にならひ、猶太人地域とアラビア人地域とを分つ聯邦制を樹立せんとするものである。最初の計畫に従へば、猶太人の邦は、イギリスの直轄地として沿海地方につくる筈であつたが、其後

分割して支配する

三七



パレスチナ地方に猶太人の移住民が増加したので——嘗て四十萬といはれたが、現今百萬に増加してゐる——最初の計畫は、その儘實施する事は不可能の有様であり、元からこの地方に住んでゐたアラビア人が、沿海地方を除いたトランスジヨルダンを含む他の全地域を果して守り得るか否か問題であると見られてゐる。その後イギリスは、此地方を委任統治地として支配するが爲に更に第三の分割を企て、エルサレムとベツレヘムよりジャファに至る迄の地域が、新たに分割の目標となつた。又モッスルより來る石油輸送管の終つてゐるヘイファ―港は、軍略上重要な地點であるから、將來恐らく中立化される事であらうとも取沙汰されてゐる。

猶太人のパレスチナは、將來イスラエル國と呼ばれる筈であるが、猶太人と雖も以上の如きイギリスの分割提議には決して同意して居らない。彼等は其の全土を處理しようなどとは思つて居ないのである。彼等は、一九一七年、時の外相バルフォア卿が、聯合軍を援助すれば、その代償として戦後パレスチナに猶太人の民族的郷土を建設すると聲明したことの實現を期待してゐるのみである。

アラビア人達がパレスチナ分割に對して猛烈に反對するのは蓋し當然のことで、一九三七年バ

グダツドには、分割反對の一大デモンストレーションが行はれ、凡ゆる階級のアラビア人が、これに参加し、その數五萬を超えたと云はれてゐる。この行列には、反猶太の標語を掲げた繪看似を押し立て、イギリスの政策を非難する文字が書き列らねてあつた。全國民同盟、大學、辯護士團等がこの運動の中核であつたことは云ふまでもない。彼等アラビア人達は、イブンサウド、エジプトのフォルコー、イエーメンのエマ王、ペルシア王、シリアの大統領等に打電し、アラビア人のためのパレスチナが分割の危機にあることを訴へると共に、此の鬭争に人々が參劃する事を懇願したのであつた。かゝる状態に當面したイギリスは、分割の計畫をより以上に進捗せしめようとはしなかつたが、今以つて事態は即觸發の危機に置かれてゐる。

英帝國の他の地域に於て、「分割して支配する」の政策が屢々用ひられてゐる事は云ふ迄も無いけれども、今は其の一々について詳述する事を略さう。此政策の目標が、弱小民族解放運動のため、或地域が、國法上の統一を持つのを未然に防止するところに置かれてゐる事實は、セイロン島が英領インドから除外されてイギリスの直轄植民地に變更され、ビルマや、マレイ半島の全植民地や、暫くの間インド總督の支配下にあつたアデン等をインドから分離せられた歴史を回顧すれば

分割して支配する



ば極めて明瞭であらう。各地に於ける反英運動の波及をおそれて分割に分割を重ねたイギリスの政策は、併し乍ら、その半面に於て、自國の信用を失墜するのを免れ得なかつた。今や、インドには民族獨立の大運動が進展してゐる。根強い反英の烽火が擧げられた場合には、イギリスの「分割支配」の政策の犠牲となつて支離滅裂の状態に陥つた國々がこれに巻き込まれ、拾收し得ざる状態を招きイギリスは、多數の軍事上の重要據點をも喪失するに至るであらう。併し自ら賤いた種は自ら刈り取らねばならない。

#### 四 インドの反抗

イギリスの世界統治の方法として知られてゐる「分割して支配する」政策の運命は、以上の叙述によつて、一應その方向を察知する事が出来たが、更にイギリスの近世史支配を支へ、今日の輝かしいイギリスの繁榮を齎らした各植民地及びイギリスの支配圏に屬する諸地方に於ける反英の運動の有様を語る事によつてイギリスの牙城が既に著しく動搖し初めてゐる事實をより具體的に了解することが出来よう。既に述べた如く、かくの如き問題は、イギリスの總力戰體制によつて、その全貌は我等の知識の外に置かれてゐた。併し乍ら、嘗てわれらがイギリスの侵略の諸政策を次々に反撃し得た様に、今や文化の面に於ても、イギリスの支配は破綻を示し始めてゐる。インド人ボース・ラスビーハリイは「印度の叫び」なる書物を刊行し、イギリスのインド侵略史、インド國民運動史の本質を、尊い體驗を通して闡明し、エ・エム・サハイも亦「印度」なる書物において、



歐洲大戰勃發以後に於けるインドの動きを闡明し、アラビアに於けるイギリスの活動も、「アラブ通信」等によつて我等の身近に傳へられてきた。

ボースは、イギリスに依る重壓に對して非常なる憤激の念を抱きつゝ、或は自己の體驗を語り、或はインド人のイギリス人に對する憤激の言葉を連ね、又は、歐米人のインド批判の言葉を掲げつゝ、日本を樞軸とするアジア民族の大同團結がイギリスの近世史を覆滅し得るとし、イギリスの政治に就て次の様に云つてゐる。「その唯一の目的は、利益を擧げ英帝國をつくるといふ事であつた。その目的の爲には、凡てが犠牲に供せられた。實にイギリスのインド征服は、偽證、偽造、詐偽、虚構の連続記録であつた。それは政治的野心行爲、政治的虚偽、政治的不徳の記録であつた。」と述べ、第一次歐洲大戰の原因を、イギリスの謀略に歸し、今次の支那事變に於て支那の背後に潜在してゐるものは、イギリスの國策であると論じ、九ヶ國會議は唯九ヶ國といふ名目のみで、實はイギリス一國の會議に過ぎぬと云つてゐる。反日輿論の主魁も亦イギリスなりとし、イギリスの日本の不法爆撃を宣傳して居るのに對して、英國自身は從來戰略的に何等の必要の無い場合にも、機關銃や高射砲や飛行機を持たない全然武装の無いインドに對して屢々爆

撃を行つてゐる事實を暴露し、これに續いて「又アフリカに於ても全ドイツ植民地なりシタンガニカに空爆撃を行つてゐる。かくの如くイギリスは世界に向つて日本の行動を非難し乍ら、自ら却つて文字通りの非道を敢へて爲してゐるのである。日本の空爆は、軍事施設や武装地帯に對するものであるからその非難は當らぬ。非難すべきはイギリス自身の行動であるに拘らず、日本の空爆を以て日本孤立化の武器に使用してゐるのである。」と論じてゐる。以上の如く、ボースが一切の世界の罪惡をイギリスの所爲に歸するに至つたのは、他ならぬ過去數百年にわたるイギリスのインド彈壓であり、有色人種の白色人種に對する、輝しい勝利なる日露戰爭に刺戟せられて擡頭したアジア諸民族の民族獨立運動の一翼として、インドが反英民族運動を展開して以來、逐次深められたインド民族の熱血の結晶である。この書に見えるインド文化の反省と、近代に於ける悲惨なる自國の文化に就いての究明とは、この熱情の産物であつた。モスリン、絹織物、毛織物、眞鍮、青銅製品等の世界的なる生産地として、又佛教文化の華やかなりし國として、數千年の歴史を有するインドが、今日の如き狀況に陥つたのは、イギリスの侵略が其の理由の最も大いなるものである事を思ふにつけて、インド人の憤激が、再び自己自身のインドを持たんとする運



動に集中するのは、洵に然る可き事であると云はねばならない。「イギリスがインドより手を引けばインドは無政府状態に陥るであらう」と云ふイギリスの意見に對して、國民主義者ラジバド・ライが「外國人が武力を以て強制する政權こそ最大のアナーキーである。インドは英國侵入前に長く繁榮してきたのであるから、英國が退去しても同様繁榮し得る筈である。他の國は皆英國の支配なくして獨立してゐるではないか。我々に統治の能力ありや否や。外人の關與を許さず自ら決す可き事である。自治は我々凡ての生れ乍らの權利であり、インドのみがその例外たり得べきではない。今日迄英國のためにのみ支配されてきたインドに於て、平均収入は英國人の四十分の一となり、平均生命は英人の五十年に比し二十二年の有様である。インドが獨立しても獨立を繼續できぬであらうといふ者があるが、獨立を獲得せるものは、これを維持しうる理である。」と云つたのは、今日のインドに於ける反英運動出現の必然性を簡明に説明したものである。イギリスはインド統治に當つて、國民の反感を抑へる爲に、國民會議を始め種々の國民主義團體や労働者農民團體等の結社を禁止し、政府が多數の修道院等教育機關等を占據し、書籍刊行物の沒收並びに發行禁止の爲に、多數の出版條令を發布する等、苛酷なる檢閲の結果、四百四十八の新聞の發

行が禁止せられたと云はれてゐるが、この様にして國民の運動を抑壓しなければならぬ理由は、その半面に於て、報道される事を好まない事實が存在してゐるからである。ボースは、「イギリス統治の恩恵」といふ皮肉な表現を以て、次の五ヶ條を掲げてゐる。

- 一、五十萬以上の男女兒童は彼等が獨立を希求せる故に現に投獄せられあり。
  - 二、最近までに三千以上（その中には子を抱けるもあり）が無慘にも殺戮された。
  - 三、數千人が劍とラチ棒の爲め負傷せり。
  - 四、數百の家屋が軍警のため焼かれ又掠奪をうけたり。
  - 五、女子（妊婦もあり）までが、銃劍の先に向けられ又は凌辱されたり。
- イギリスが、かゝる事實の、インド民衆の間に廣まる事を喜ばず、専らこれの隠蔽に力を致すことは無理からぬ處置と云ふべきであらう。此様な彈壓に要する軍費は然らば如何にして徴せられるか。莫大なる印度の軍費は、インド民族の獨立を抑壓するために使用されつゝあるのである。嘗てマクドナルドは、インド軍費の九割迄は英帝國のため使用される事を指摘し、更に、カナダ、南阿、オーストラリアも亦、インド並みにイギリスの軍費を負擔させられて居る事實にも言及



し、インドが多額の費用を負担したるお蔭で保護されてゐる此等自治領が、インド人の入國を拒んでゐるのは、實に皮肉である。インドはアデンの費用、アジア各國に派遣されてゐる英國大使の費用も負擔せねばならない。インドはまた先帝の戴冠式の際英國が招待した代表の費用も負擔せねばならなかつた。」とインドに對するイギリスの苛酷な遣り口を率直に吐露したのであつた。

イギリスの統治下に屬して以後のインドは、經濟や宗教や教育や保健施設等においてイギリス本國民と同様の状態におかれたであらうか。成程立派な政廳以下壯麗なる銀行、教會堂、大學、研究所、圖書館、博物館、病院等は目貫きの場所に幾つか建てられた。鐵道も次第に其延長距離を増加して來たに相違ない。併し此等に依てインドの國民生活は必ずしも改善されたものでは無かつた。或は穩當を缺く言ひ廻しかもしれないが、此等はインドを搾取する機關であつたと評さなければならぬ。サイモンの報告によれば、一九三一年に於けるインド人の平均収入は英國のそれの十二分の一に當つてゐるに過ぎない。ガンジーが有名な飢餓戰術を以てイギリスに反抗の意を表明するに先立つて、アルウィン卿に提出した手紙の中に「例へば貴下自身の俸給を例にとつてみられよ。それは他の幾多の間接的增收を別にしても、一ヶ月二萬一千ルピーを越えてゐる。イ

ギリスの首相は、年俸五千ポンド、現在の換算率をもつてすれば、一ヶ月五千四百ルピー以上に當る。インド人の平均収入は一日に二アナ——アメリカの金にして五セント以下——であるに對し、貴下は一日七百ルピーを取つてゐる。大英帝國民一日の平均収入は、ほと二ルピーであるのに對し、首相は一日百八十八ルピーをとつてゐる。従つて貴下はインド人の平均収入の五千倍よりも遙かに多くを取りつゝあるのであり、イギリス首相はイギリス人の平均収入の僅かに九十倍をとつてゐるに過ぎないのである。貴下がこの現象をとくと熟考下されん事を私は謹しんでお願い申したい。」と述べた事を思ひ出さざるを得ないのである。イギリスの搾取に依つて、インドの饑饉は年と共に多くの餓死者を出だし、十九世紀以來饑饉の爲めに餓死した者は、歐洲大戰に仆れた人の數よりも多いのである。いま十九世紀一世紀間に饑饉のため死亡せる者を二十五年宛に區切つて示せば左の如くなる。

年 度	饑饉回数	死亡者數
一八〇〇—一八二五	五	一、〇〇〇、〇〇〇
一八二五—一八五〇	一一	四、〇〇〇、〇〇〇

インドの反抗



一八五〇—一八七五	六	五、〇〇〇、〇〇〇
一八七五—一九〇〇	一八	一五、〇〇〇、〇〇〇

一九〇〇年から一九〇二年に互る大饑饉に於ては、實に一〇、〇〇〇、〇〇〇人が餓死したと云はれてゐる。これが自然の現象であると解し得るであらうか。われらは、食料配給と云ふ當然の處置を講じなかつた政府當局の暴虐を茲に思はざるを得ないのである。

宗教に關しては、既に述べた如く、ヒンヅー教徒と回教徒との衝突の深刻化が、イギリスの政策に依つて企てられて居り、教育に於ても、必ずしも一部で宣傳せられてゐる様にはインド人の知識程度の増進を齎らして居らない。現在読み書きをなし得る者は、全人口の僅か八%、即ち百人中九十二人迄は文盲であり、イギリスの文化が相當浸潤して居る筈のインドであり乍ら、英語をよみ書きし得る者は、人口一萬につき百二十三人に過ぎない。この様な狀況を目撃したアメリカ合衆國教育協會長ウイリアム・ハリスは、嘗て或議會の席上で「英領インドには一の公立自由學校も見出され無い。義務教育の制度すら無い。併しインドの青少年は飢えた様に教育を望んでゐる。古き文化と驚嘆すべき哲學とを有する此大陸に、教育の普及を計る事は、英國の當然なす

可き義務である。」と云つたことがあつた。

立派な病院の陰に隠れたインド國民の健康の状態は如何。病院の威容と相應するものであらうか。貧困なる生活を強ひられてゐるインド國民が、萬病の因とも云ふべき營養不良に陥つてゐる事は想像に難く無い。イギリスの統治以來、インドには疫病、コレラ、インフルエンザが未だ嘗て無き流行の記録を残し、死亡率は高く、就中幼兒死亡率の如きは千につき百八十七に達するといはれてゐる。インド人の營養不良について或る人は、三人に一人が飢えてゐるとさへ云つてゐる。ボースも亦、インドでは「凡ての人が三度の中一度の食事をとつてゐないわりになる。インド人が肉體的に進歩しないのは、かゝる原因に基くものである。然もイギリスは、インドが満足し繁榮し、イギリスのおかげで治安は保たれ、衛生設備、饑饉對策が行はれてゐると誇る。而して、かゝる飢えた國よりイギリスが巨額の富を得んとしつゝあることは、大きな運命の皮肉である。イギリスが所謂イギリスの平和 Pax Britannica により、インド人を飢餓戦線に逐ひ立て乍ら重税を課し、インドの凡ゆる生活を吸収してゐる事實を認めようとし無いのは、勿論容易に理解出来る事である」と述べてゐる。



かくの如き有様であるから、日本を中心とした東亞の黎明に臨んで、心あるインド人の間に反英運動が日と共に高まりゆくのは蓋し當然の成り行きである。その運動の状況はエ・エム・サハイの著書「印度」に窺ふ事が出来る。

一九三〇年、先に述べた如く、ガンヂーは時のインド總督アルウィン卿に書を寄せて、種々要求する所があつたが、その大要は、一、絶對の禁酒、二、地租を少くも半減する事、三、鹽稅の廢止、四、軍事費の半減、五、高級官吏の俸給を半額以下に減する事、六、政治犯人全部の釋放、七、政治的檢擧の廢止、八、煽動的集會禁止條令の撤去、九、國外追放者の許容等である。イギリスからインドに向ふ空の船舶の底につめ込んで運ばれて来るイギリス鹽の輸入を助けるため課せられたインド國內の鹽に對する重稅は、就中此時の反英運動の大いなる原因であつた。此要求の拒絶せられた後、直ちに開始せられた有名な不服從運動の先頭にたつたガンヂーは、闘争のために訓練した八十人の義勇軍を率ゐてゐたが、この一行が各地を通過するや、インド人は群を爲して沿道に立ち並び、三週間にわたる行軍は絶大なる示威的な價値をもち、インド全土にわたつて犠牲と奉公の熱情を湧きたし、イギリス政府は抑壓にいたく苦慮しなければならなかつた。

イギリス商品のボイコット！これがインド國民によつて屢々繰返へされる闘争の手段であるが、この時も矢張この手段を以つて戦ひ、官憲は凡ゆる身分地位の老若男女を幾千萬と無く逮捕したけれども、これは寧ろガンヂーの術中に陥ることであつた。政府は武器を持たない此等の運動者に對して機關銃や装甲車を向け、ベシヤワルに於ては靜肅な行列の中へ装甲車を突入せしめ、多數の群衆を殺傷し、群衆は報復手段として二臺の装甲車に火を放ち、軍隊の銃火を浴びて多くの犠牲者を出したのであつた。運動の進展につれて國民運動は愈々激化し、ボンベイの街々には、禁制の國旗が掲揚せられ、幾百といふ家が國民議會の事務所であると宣言し、警察は手のつけようの無い狀況であつた。又或時は勇猛な一人の運動家がマドラス高等法院の建物に上つてイギリス國旗を引き摺り下し、インド國旗を掲げた。又或る町では、數名の運動家達によつて警察所の掲揚柱にインド國旗がはためいたことがあり、官立大學の看板が「國民議會大學」と書いた看板にかけ代へられた事もある。この運動に對する資金は、各所より集り、十才にもたらない少年少女達が、禁斷の國旗を掲げて警察所に行進したとも云はれてゐる。このやうな反英運動は、勿論、このまゝ終熄すべき道理はない。時に高低あるはまぬかれないとしても、その後今日に至るまで



時を経るにつれて深刻化の傾向をたどつてゐる。これに對するイギリスの彈壓が愈々苛酷の度を加へるのもさけ難い勢である。純情なインド婦人が、カルカッタ大學の卒業式に於いて、ベンガル州の英國知事スタンレー・ジャクソン卿が卒業證書を贈與しつゝあつた時、これを狙撃した事件、イギリスの暴虐を悲憤慷慨した英提督の息女マデリン・スレード嬢が、ガンジの精神に私淑し、ミラ・バイなる印度名をもつて、イギリスの暴狀を暴露したことは、この間の消息を物語る好箇の例話であると云つてよからう。

ジャクソン卿を狙撃した二十一歳の印度女性ピナ・ダス嬢は法廷に於いて次のやうに叫んだ。

「私は考へて居りました——一印度人として生活する事に、果して人生の價値があるかと云ふ事を。外國政府の虐政の下に、こんな不當な服従を強ひられ、そして絶えず悲しく呻吟して居るより、生命を棄て、是に對し一個人としての崇高なる抗議をする方が良くはあるまいか。印度人の一人の娘と一人の英國人の犠牲に依り、屈從の永續状態に甘んじてゐることの罪惡であることを印度人に自覺せしめ、そして、英國をして其の不義不正なる事に目醒めしめぬであらうかと。これは私の頭腦の入口で、追拂ふ事もなだめる事も出來ず、恰も絶え間なく響く鐵鎚の打撃の様に

始終轟いて居た一つの問題でありました」と。同族婦女子が、トラックに積み込まれて人里離れた所に連れ去つて放置せられたり、暴力を加へると脅かされたり、手を加へて殴打される實狀が聞かされ、凌辱その他の侮辱が加へられ、或は男子監獄に投ぜられる悲惨な狀況を知つては、インド婦人の中にこのやうな意見をもち、かやうな直接行爲に訴へるものの出現するの必ずしも不思議ではあるまい。

英國の統治は滅亡の運命にあることを、

「英國の野蠻さは、史上に於いて最も惡魔的なものである。印度人は、今や英國の統治の本質を知つたが、それは聽て亡ぶべき運命にある」

と斷言したマデリン・スレード嬢は「ヤング・インディア」に次の如く述べてゐる。

「英印政府が警官の非行を一向意に介しないのに鑑み、私は自らダーラサナに赴き、サチアグラハ運動者が如何なる状態にあるかを視察した。私は六月六日の晝ブルサルに到着したが、一度其の朝逮捕せられた負傷者が擔架に乗せられてやつて來た。

醫者や附添のものは「今日の殴打、拷問は實にひどかつた」と言つた。私は病院の各室を廻



り、サラアグラハ運動者の負傷程度を視察した。而してそれ等は或は頭から足まで負傷し、或は傷のために横になれぬものばかりであつた。中には回教徒で腹を打たれた上、罌丸を締めつけられたものもあつた。次いで二階に上つて見るともの凄いのうき聲が聞えた。一人の青年は罌丸を締めつけられたばかりでなく、腦を打たれ、狂人の様になつてゐた。他の棟に行つて見たが、同様の負傷者ばかりであつた。そして何れも口々に警官の言語に絶する横暴を憤慨してゐた。……ラチ棒で頭部、胸部、腹部、關節を打つ、局部を殴打する。殴打の前に裸體にする。腰布をとり肛門に棒を突込む、人事不省になるまで罌丸をしめつける。足と手を持つてひきづり廻し、且つ殴打する。負傷者を藁藪又は鹽水の中に入れる。馬蹄で群集を蹂躪、身體に針を刺し、又針の中に投込む、意識を失つてもなほ殴打する。云々」

インドの獨立運動は一體何處に行く。ガンヂーの不服従運動によつて、圓卓會議は三度開かれたけれども、イギリスは用意周到、温和派の代表者を選んで、印度側の一致した意見を達することは不可能なやうに仕組まれた。「私は英國臣民であり、また然う呼ばれることを誇りとした時もあるが、今や英國臣民と自ら呼ぶことを停止すること幾年にも及んでゐる。私は臣民と呼ばれん

よりは寧ろ反逆者と稱ばれんことを遙かに希望するものである」と絶叫したガンヂー、が飢餓闘争に訴へてまで反英運動の激化を計つたが、未だその結果は齎らされてゐない。手を代へ品を代へるイギリスの彈壓は、國民運動の側にも分裂を呼び起した。シャワハラル・ネールを中心とする第二インター系の左翼運動の展開がこれである。かくて今次の支那事變勃發に際しても、印度は當然向ふべき「日本との共同戦線」に到らず、宋美齡はインド國民會議を援蔣陣營に動員せんとし、ソ聯は又ネール一派の運動を支持し、タゴール翁は明らかに反日的宣傳をなしつつある。

併し乍ら、二億三千万のヒンヅー教徒の中心機關たる「ヒンヅー・マハサバ」は、インド革命の元老サバルカルを統帥者に仰いで、積極的に日本を支持し、印度の進むべき正道、打倒イギリスの途を進軍してゐる。昭和十五年三月二日發の同盟通信は、一日パトナにおける印度國民會議派運用委員會が、イギリス政府の宣戰否認、歐洲戦争不介入の斷乎たる抗英決議を採擇し、これに對して印度各紙は二日の紙上に一齊に論評を加へこれを歓迎してゐる旨を報じてゐる。或は支那事變の眞義が漸く國民會議派にも理解されるに至つたのかも知れない。「反英、抗日を旗印」として闘ふ限り、インドは永遠に救はれないであらう。



## 五 西南アジアの反抗

パレスチナに於けるイギリスの分割支配政策が、猶太人には違約の嘆きを與へ、アラビア人には多年住みなれた土地を喪失する怨恨の情を募らしてゐることは、既に述べた通りであるが、茲には、更に猶太人に對するアラビア人の憤怒と、アラビアの反英闘争の有様を記さう。

イギリス政府が、パレスチナを委任統治國として聖地を擁護すること、パレスチナを猶太民族の民族的郷土として猶太人の移住に便ならしめる如き政治的、行政的、經濟的條件を樹立すること、パレスチナに於ける自治機關の發達を保證する如き政治的、行政的、經濟的條件を樹立すること等を自らの義務とするに至つたことは、アラビア人にとつては死活問題であり、イギリス人と提携する猶太人に對する憎惡の念は押へ難いものとなつた。かくてハバルデン地方に蜂起したアラビア土民は、ロシユ

ビナ・ハイファツール・キヤルム附近に於いて猶太人農場を襲撃し、約十エーカーに及ぶ小麥畠に放火したる他、猶太人農家を破壊し、バルース・ピーサン・ホデイラ・ムタワリー・サモニヤ等の各地に於いても、猶太人農場を襲ひ、果樹を切り倒し、農家に放火する等、イギリス政廳はその取締りに困難を極めた。小學の兒童までが反猶太反英戦線に自發的に參加した如きは悲愴なるアラビアの現状を端的に示すものであらう。即ち、トランス・ジョルダンの一村落のアイテと云ふ村で、登校の途中三十二名の小學兒童が姿を消し、大捜査を行つたところ、パレスタイン國境附近に於いて、手に手に短刀を所持し、パレスタインに救援に向はんとするのを發見したのであつた。かくの如き反亂行爲の鎮定に、四千六百の猶太人を志願兵の形式を以つて募集し、アラビア人と猶太人との衝突を激化せしめる對策をとるイギリス政廳のやり口は、巧妙と評するには餘りにも陰慘であらう。

兩者の關係悪化したある時期に於ける五ヶ月の間出來事を記した通信には、次の如く見えてゐる。

クヅスに於いては猶太人側より襲撃あり、アラビア側死者四、負傷者三十六。



ジュニオンに於いては、アラビア土民猶太人農場を襲ひ、果樹を切り倒し、農家に放火、之に附随して英軍と土民軍間に衝突あり、多数の死傷者を出した。

ヤーファ、クダス、ハイファの各地の猶太人アラビア人を襲ひ、アラビア側に對抗し、到る處に衝突あり、右諸市は大混亂に陥り、政府もたゞそのなすが儘に任すの餘儀なき情勢であつた。

アラビア土民ハドフカ、ホデイラ等の猶太人農場を襲ひ、農作物を抜きとり、果樹を切り倒し家畜を掠奪し、農家に放火し、その荒掠振りは徹底的であつた。

ハイファに於いては、三日間に互り衝突があり、双方の店舗、市街、バス等は破壊に任され、死者百餘名に達した。

アラビア土民カファルブーナの猶太人農場を襲ひ、オレンジ果樹四千本を切り倒し、農料器具を破壊、馬數十頭を掠奪、附近の農家を焼き拂つた。猶太人側に死者負傷者多数を出した。

その激しさ想像にあまるものがある。かくて、パレスティン在住の猶太人の中には、農業経営や製鹽洋灰等の工業に従事することの危険を感じるもの多く、アラビア人間に秘密結社が結成され

てアラビア土民達の潜行的テロ行爲漸く熾烈となるに及び、遂に逃避を企てるものを生じ、三十名の富裕なる猶太人が二百萬ポンドの資金を携へてアフリカ方面に移住した事實さへもある。又諸外國よりパレスティンに來住せんとして、豫てパレスティン銀行に送金してゐたものも、これを回収してアフリカ方面に移住地を變更したと云はれてゐる。

イギリス政府の支持を有する猶太人は、アラビア側の諜報をとる役割をも果しつつあつたので、パレスティンの土民軍に於いては、イギリス側並に猶太人側の諜報者、及びこれに關聯を有すると推測される者を嚴重に搜索し、徹底的なる制裁を加へることを議決し、一般アラビア人もこれを歡び迎へ、先づ鋒先を猶太人に向け、アラビア人の多数居住する地方に於ける猶太人を片端から檢舉したのであつた。又政府軍が屢々土民側に裏をかゝれて測らざる被害を蒙るのに鑑み、パレスティン政府が、アラビア側の諜報者の絶滅を期し、アラビア人はその善惡を問はず、ホーファイエ（アラビア人が被つてゐる後方及び側面に垂れのある一種の帽子）を被つてゐるものは、これを全部スパイ又は反亂者と見做して檢舉すべしとの命令を發したことがあるが、土民側は直ちにこれに對抗し、一般アラビア人は全部ホーファイエを被るべし、これに反する者は賣國奴



と見做すと布令し、ためにアラビア人の間に瞬く間にフェズ（赤いトルコ帽）は影を消したと云はれてゐる。

かくの如く、アラビア人と猶太人との争闘は益々激化の一路をたどりつゝあるが、その間、アラビア人が眞の敵たるイギリス政府に對する反撃は更に激烈となり、鐵道破壊、道路破壊、電信線切斷等によつて、交通を遮斷するのみでなく、積極的攻撃をも敢行し、メスベレ及びクダツヅムに在るイギリス駐屯軍本部シャファール、アムル及びナブルス附近の警察隊本部を襲撃したり、イラク石油會社石油輸送管に小銃彈を打ち込み、これに點火する等、仲々活潑なる戰闘を次ぎ次ぎに展開し、イギリス側は鎮定に手を焼いてゐる。全パレスチナのアラビア秘密結社の結成に伴ひ、政府側の任務に従事中的アラビア系官吏、警察官の辭職が強要され、通譯嫌疑者の摘發が續々と行はれたため、アラビア系官吏、警察官の姿を消すもの續出したことも、反亂鎮定上少なからぬ障礙となつたことは云ふまでもない。

かくの如くして、反亂は次第に全國的となり、パレスチン以外に居住するものも、この反英運動を激勵するに至つたので、イギリス側は、事變が報道せられることを極度に懸念し、アラビア系報道機關の彈壓に力を擧げると共に、精銳なる近代兵器を用ひて殲滅戰を各所に展開せざるを得なかつた。

即ちパレスチン政府は、新聞記事取締令を發して、アラビア語新聞が、騷擾に殉じたアラビア人に尊稱、敬稱を附し、殉難の志士として國民の前に之を稱揚し、國民の奮起を促すのを阻止せんがために、彼等に尊稱を附することを禁じ、英駐屯軍の爲めに處刑せられたアラビア人の姓名を掲載する事をも同時に禁止した。更にパレスチン政府は、検閲部長、オーエン・アルデイト・トウイデイの名を以て、「出版法第十一條により、アッカ、サウドその他北パレスチン地方一帯に於ける政府軍隊の動靜に關しては勿論、警官隊の活動に關しても一切の具體的、並に右を暗示するが如き總ての記事掲載を禁ず、又、國境方面鐵條網に關しても同様禁止す」などの命令を出し、次いでパレスチンの有力新聞ティファール、ジャミヤ・イスラミヤ、シーラット、ナフィール、ミルアット・シャルグ、ソート・シャーム等の諸紙を發禁處分に附し、唯アハバール紙のみに發刊を許し、同紙は、重要記事に當てらるべき第一面に、馬の病、牛の話、米國に於ける林檎の話等を掲載してゐる有様となつた。



併し報道機關を停止しても尙情報は人の口から傳へられる。これに對しては禁足令と箝口命とを強行した。即ち各地の情勢悪化した或る時期に、ナスラ、アッカ、ツールキヤルムに對しては二十四時間、サファッドに對しては五十八時間、ハイファに對しては六日間の禁足令を發し、一般パレスティン住民に對し、北部パレスティン地方に於ける情勢に關し箝口令を出して臆説の流布を嚴重に取締ることとしたのである。

アラビア人のゲリラ戰に對しては、銃器の取締を殊に嚴重にし、拳銃携行者の如きは之を銃殺に處する有様である。鐵條網は國境地帯の要地に張りめぐらされ、各主要都市並びに要地には飛行基地を續々増設し、土民のゲリラ的襲撃を警戒して、何れの飛行場の周圍にも深い壕を掘り、鐵條網でこれを圍んでゐる。かくの如くして近代戰的裝備を誇るイギリスの兵器は各地の擾亂に使用され、爆撃機、タンク、装甲自動車、機關銃の偉力は、遺憾なく發揮されてゐる。土民の執拗なゲリラ戰に悩むイギリス軍が、比較的温順なるアラビア土民部落を襲撃する場合の如きは、洵に慘澹たる光景を現出する。タンク、装甲自動車、飛行機を以つて復讐的逆襲を試みたイギリス軍が、無防備の土民部落より男を拉致し、家屋を破壊し、食料品を奪掠したり、婦女子は知人を

頼つて他の部落へ四散せしめられたことは屢々あつたやうである。此の種の襲撃を受けて廢墟となつた都市村落は、ナゼルス市、ケフリン及び、リンマーナ村以下十數ヶ村に達してゐるのである。

正攻法に於いて敵し難いアラビア人の憤激は、愈々猛烈となるは蓋し止むを得ざる勢であつて、反英の氣運は徹底し、ある時ハイファで數名のイギリス人がアラビア側の情勢を探索してゐたところ、アラビア民衆はこれを襲撃し、重傷を負うて、イギリス人病院に收容せられたところ、アラビア人は、深夜同病院に潜入して療養中の重傷者を刺殺したことがあり、ナブルス及びツールキヤルムでは、政府側に臨時に雇はれてゐたアラビア警察官を土民等が銃殺し、死骸には、それぞれ、イギリス側に働きたるものゝ最後はかくの如しと書いた紙片を貼附したと傳へられてゐる。又パレスティン駐在高等辨務委員一行がトランス・ジョルダンのアンマンを視察した時、第一次の時には、土民達は何れも學校、商店、一般民家を悉く鎖して、之に沈黙の威壓を加へ、再度出掛けた時には、土民達は、一行の入市を拒み、已むなく近村に宿泊した一行に對して、われらは諸君の來市を歓迎せず。われらはパレスティン分割案に絶對反對なり。英政府は直ちにこれ



を撤回すべし。」と電報を以て抗議し、サルト市に於いても土民は大會を開催して反抗の氣勢をあげ、速かに反人道的行動を撤去すべしとの決議文を突きつけた。一行は更にカラクに赴いたが、サルトよりの通報によつて、此處でも入市を拒否せられ、空しくパレスティンに引揚げざるを得なかつたのである。

強力なる近代的兵器を有するイギリス側が、かくの如き土民の反抗に屈するが如き事は到底あり得べき筈のものではない。彈壓が次々に苛酷となるは必然的である。茲にその状況を窺ふべきものとして、パレスティン高等辨務委員會に提出せられたる、アラビア婦人會の決議文を挙げよう。

「英國軍隊の野蠻暴虐は言語に絶し、例へば最近マゼレム、セテム地方村落に於いて彼等がなしたる鬼畜の如き行爲は、貴官等に於いてもよく承知し居らるべし。大英帝國の名に於いて爲されたる右の如き行爲は、文明國の行爲として妥當なりや。須く勇らしく行動せらるべし。貴政府の吾等に對する虐政は、昔日のスペインのそれの如くである。無辜の一アラビア人を捕へて打擲の限りを盡し、最後に野犬に之を噛ましむが如き、之を英國の文明と云ふや。云々」

とその一節には見えてゐるのである。

アラビア土民の死闘！これに對する同情は各地より翕然として集まつた。激勵の辭は勿論のこと、零碎な収入より積み立てた血の出るやうな義捐金も續々とパレスティンに齎らされるのであつた。在北米のアラビア人が、七月二十四日を以てパレスティン在住の同胞に對する同情デーと決定し、アラビア土民の受けつゝある暴狀を訴へ、義捐金募集のための積極的活動を開始したのを始め、各所より反英資金が齎らされ、イギリス政府に對する抗議文も亦數多提出せられた。

シリア、レバノンのオラマ（有識者）は、大會を開催し、パレスティン及びアレキサンドレッツタ問題に關する討議を行ひ、英政府に抗議電報を發送、同時にベルートにある關係國領事にも同様の抗議文を送つて居り、トランス・シヨルダンからは、パレスチナのナブルス市のアラビア難民に對し、六千シリア磅及び麥一萬二千樽の義捐が行はれ、同國の多數青年はパレスティン叛亂土民援助に参加したと傳へられてゐる。イラク國の大僧正モハマッド・ホセイイン・アリー・カツシュフは印度に教書を發し、激越なる調子で、反英、反猶太闘争を鼓吹し、印度に於いては、此の影響も加はつて、反英刊行物が漸次一般に氾濫の兆を示し、曩にパレスティン同情デー決定會



議に参加して諤々の論をなしたシア一派の有力回教徒ラヂヤ・モハムムード・アバードは、更にイギリスの政策を徹底的に誹謗排撃せる抗議文を發表した。又サウデイ・アラビア國皇太子も、ヨーロッパよりの歸途マルセイユに乗船の際「パレスタイン問題は、全アラビアに深く關聯してゐるから、右問題は、われらアラビア人の手によつて解決せられねばならぬ。アラビア人各個はパレスタイン防衛に盡す義務がある。自らも斯くせねばならない。云々」と述べたのである。印度の民族運動に、婦人達の熱誠をこめた参加があつた如く、パレスタイン問題にも婦人の支援力強きものがある。例へばエヂプトの一婦人ホダ・シーラウイ夫人は、パレスタイン問題、埃及アラビア間の諸問題、シオニズム運動等に關する討議のため、カイロに於いて全アラビア婦人大會を開催せんとしてアラビア各地に招請狀を發し、各地に於ける婦人の活動は次第に活潑となつて行つたやうである。

シリアに於いて結成された防衛會は、次の如き趣意書を同封して、各地のアラビア同胞の聲援を乞ひ、これに對する反響は頗る注目に價するものがある。趣意書は次の通りである。

パレスタインに於けるわれらアラビア同胞は、英獨の壓制迫害に對し、今日まで勇敢に抗争し來

りたるどころ、外部よりの有効適切なる支援十分に到らず、彼等の高價なる流血は、次第に多きを加へ、困窮その極に達する現状なり。單に聲援のみならず、局外居住の全アラビア民族は、この際積極的に具體的援助を爲さざるべからず。

昨年十一月シリアのブルードンに於ける會合にて、教祖マホメットの誕生日を以て、パレスタイン・デーと決定、全世界の同情と支援を期せしが、今回來る九月二十二日をもパレスタイン救援日と決定せり。

希くば各位より多分の義捐を送金され、速かに彼等が暴狀の手を排除せんことを切望して已まざる次第なり。

尙將來この種決定に關し、逐次各位に御通報申進むべきに就き、宜敷御高配あらんことを。

在シリア

パレスタイン防衛會會長

ナ ビ ー

かくて、問題は急速に擴大した。

西南アジアの反抗



シリア 曩に決定を見たパレスティン・デー(九月二十二日)のため、この地に於いても金品の寄贈續々と集りつゝあるが、各地よりの獻金状況は左の如くである。

- ワシントンより 三、〇〇〇シリア磅
- ヴェノス・アイレスより 三、〇〇〇 同
- フロリダより 三、〇〇〇 同
- 在シリア舊教父團より 三、〇〇〇 同

又エジプトに於けるアラビア民族會議に招請を受けてゐたシリア國民議會は、使節團を組織し、カイロに向けて出發した。

パレスティン 全國的調査の結果、此の地方に居住するアラビア人と猶太人との數は、アラビア人一、〇一四、一六六人、猶太人四〇一、五五七人であり、事變勃發後約十ヶ月間の猶太人の出入は

出 國	
一年以上在外滯留	一二、一九四人

入 國	
一年以内在外滯留	一八、六一四人
計 旅 行	一二、一九二人
計 移 住	四三、〇〇〇人
計 旅 行	七、六一二人
計 移 住	八、五一六人
計 旅 行	一六、一二八人

となつてゐる。以て兩者の鬭争の深刻なることが出來よう。イラク、西班牙領モロッコ、チュニス、クエイト、アデン、サウデイ・アラビア等に於いても、パレスチナの民族運動に相呼應するアラビア人回教徒の反英運動は激化し、税關の襲撃、官廳の砲撃、投石、鐵道枕木取外し、鐵橋破壊、電線切斷等の暴動に移つた例も決して少くないが、今は詳しく記述することを省略しよう。

イタリア政府の回教徒工作が之に加はつたことによつて、問題は更に擴大し、反英運動が恒久



化せんとしてゐる有様は、近頃の報道に現はれてゐる如くである。

以上略述した印度とパレスタインに於ける民族運動、反英運動の外に、イギリス各植民地及委任統治地にあつても、大小の差、強弱の差はあるが、殆んど例外なくイギリスの統治に對する反抗の氣色が現はれてゐることは茲に縷説を要しないであらう。これに對して、イギリスの「分割して支配する」政策が如何なる効果を收め得るであらうか。多年イギリスの彈壓に虐げられた植民地や委任統治地の原住民の反抗はやがてこの政策を無効に終らしめるに相違ない。既にその兆候は各地に現出してゐる。惡辣なる政策が却つて民族的團結を強化する運命は、先に之を明示した通りである。併し乍ら、植民地や委任統治地でない東亞諸國即ち日本や支那に對する目に見えざる政策、學問や思想や經濟を通じて行はれつゝあるイギリスの政策は、容易に未だ決定的なる破綻を示さないやうである。イギリス王立國際問題研究所の近刊「イギリスの極東政策」に明記された一九三一年以降のイギリスの對支政策の如きは、われらの慎重なる反省を喚起するものと云ふべきである。右の書物によれば、

一、イギリス政府は「國際的義務を完全に遂行する」決意を有するが、同時に好戰的處置や戰

争に誘ひ易い他の挑戰的行爲はこれを阻止する。

二、イギリスは「獨立を維持する」ための支那の奮闘に對して、支持を惜まないが、その支持には前項と同様の條件——戰爭に誘ひ易い他の挑戰的行爲を阻止する——が附される。又イギリス政府が日本との一切の友好關係を直ちに失ふことを欲しないと云ふことによつても制約される。

三、支那に於けるイギリス權益の基礎を危殆に瀕せしめることを拒む。但し必要とあれば、個々の場合の商議はこれを辭せぬ。

四、「和平のためになし得る一切の可能なことを試みる」用意を有す。

五、合衆國及びフランスと協力する希望を有し、且つそのために努力しつゝある。

イギリスの輿論は「あくまで支那を支持し日本を膺懲すべしとなすもの」と「日本を助けることによつて支那に於けるイギリスの利益を擁護すべしと主張するもの」との二者に分れてゐるが、これを右の五ヶ條に披瀝された對支政策の根本と考へ合はす時、洵に、興味ある事實が見出される。イギリスは日本が優勢ならば日本を支持し、事態が支那に有利に展開すれば支那と提携する



であらうことは極めて明かである。何れの場合をとるにしろ、その望むところは、近世期に獲得した支権益の確保以外にはないのである。東亞舊秩序の維持、惹いては世界舊秩序の維持、これこそイギリスの現在求めて止まざるものであり、そのために總力戦體制が有能なる活動を繼續してゐることを看破しなければならぬ。インドやパレスタインやアイルランドでは、國內の二つの勢力の分裂を通してこれを支配せんとしたイギリスは、今や東亞に於ける日支兩國の對立を通して、自己の舊勢力を維持せんとする。「分割して支配する」政策はこのやうな形で現在尙われらの周圍を圍繞してゐる。加之、日支兩國内に親英陣營が種々の形で構成せられつゝあるのを見る。嘗てアダム・スミスは、經濟に關して「見えざる手」を發見した。われら皇民は東亞を攪亂する今日の「見えざる手」の本體を正視しようではないか。

### (附 記)

昭和十五年三月八日の東京朝日新聞には、「猶太人の反英示威、パレスチナに續發」「近く不服従運動、印度國民會議派畫策」なる見出しの下に、同地方の最近の情況を左の如く報じてゐる。

去る二月末パレスチナにおいて、ユダヤ人が反英示威運動を起したため、同地駐屯英國騎兵隊が出勤、發砲して漸くこれを鎮壓した事件が檢閲網を潜つて五日明かにされた。

事件の原因は英國植民相マルコム・マクドナルド氏が二月二十八日英國下院においてアラビア人所有土地のユダヤ人への割讓を制限する新法令を發表したことにあり、これに激昂したパレスチナのユダヤ人は、翌二十九日エルサレム、ハイファ及びテラヴィヴの三市に一齊に反英示威運動を行つたものであるが、その内ユダヤ人の町テラヴィヴ市の騒ぎが最も大きく、一萬五千人以上のユダヤ人が参加し、主要街路にバリゲードを構築して警官隊と對峙事態險惡となつ



たので、遂に英國騎兵隊が出動するに至つた。騎兵隊は抜刀して示威運動の群に解散を命じたが、彼らは益々氣勢を上げて反抗を續けたため、騎兵隊は銃を執つて最初は空中へ威嚇發砲を行ひ、これが効果なしと見るや遂にユダヤ人群を射撃した。その際彼らの脚を狙つたと騎兵隊ではいつてゐる。結局ユダヤ人側に約百四十名、警官隊に數名の負傷者を出して騒ぎは収まつたが、その夜外出禁止令が發せられて、女だけが一日に二時間だけ食料品買出しのために出歩くことを許したところ、三十日(9)には忽ち女房連中の示威運動が起つたので、この特別許可も直ちに中止となつた。エルサレムでは白の制服に身を包んだ看護婦の一隊が眞先に運動を開始して、これに大學生が呼應して群衆を煽動した。負傷はユダヤ人四十六名、警官十六名、ハイファでは群衆が裁判所焼打ちを試みたが、警官隊によつて蹴散らかされ、九十名の負傷者を出した。この間アラビア人は平靜を保つてゐるが、本國政府に對して土地讓渡制限令の撤回又は發布延期を要請した。ユダヤ人が右制限令に反對するのは、先の大戦最中に例のバルフォア宣言によつて、英本國から約束されたユダヤ人國の建設を不可能ならしめるからだといふにあり、各地の騷擾はなほ續出してゐるものと思はれる。

なほテラウイヴで騎兵隊に射たれた十八歳の大學生は遂に死亡したと後報が入つた。

x x x

ボンベイより當地に達した情報を綜合するに、過般インド總督、國民會議派、回教徒聯盟間の妥協工作失敗以來、インド政局は會議派系各州内閣の辭職以外未だ表面上の波瀾なく、比較的平靜を保つてゐるが、アサッド新議長(ガンヂー派の巨頭)は早くも不服従運動開始の必然性を闡明し、又同大會に附議すべき決議草案中には、

- 一、自治領案を排撃し敢然獨立に邁進す。
- 一、印度の獨立デモクラシー、國民的動向を基調とする憲法を印度人自身でつくるため憲法議會招集を主張する。

- 一、各民族間の一致融合は憲法會議以外の手段では達成し得ず。
- 一、少數種族、王侯國に關する障礙は、英國の作り出すところで、これが解決には印度を外國の支配より解放するより他なし。





一、各州内閣辭職は、インドを戦争より分離し、インドを英國より解放するための豫備行動で、これに續くものは不服従運動であらねばならぬ。

旨を述べてゐる。但し不服従運動の開始については非暴力主義を條件としてゐるので、會議派左翼領袖ボース氏の如きは、尙幹部の決意に疑惑を抱き、妥協反對協議會を作り、運用委員會の態度監視と共に民衆獲得に努力中である。

x x x

三月八日の大阪毎日新聞にも、西南アジア問題に關するロンドン駐在工藤特派員の報道を「パレスチナ又動搖、土地の讓渡禁止で今度はユダヤ騒ぐ」と云ふ見出しで掲載した。

戦争開始以來比較的平和を續けて來たパレスチナは、英政府の土地讓渡禁止法の發表とともに動搖を開始し、ユダヤ人の示威運動、パレスチナの不安とともに、英國内にも、聯盟の存在を無視した英國の強壓手段に反對の聲高く、六日の議會はその討議に與へられた。

即ち六日下院では、労働黨のノエル・ベーカー議員、シンクレヤ自由黨黨首らが英國政府の

パレスチナにおける土地讓渡禁止法を聯盟の義務に違反し、且つユダヤ人への裏切行爲として攻撃、パレスチナ問題に關する政府不信任動議を提出したが、この動議は二九二票對一二九票をもつて否決された。英帝國內の一弱點と見られてゐたパレスチナが戦争以來意外に平靜で、ユダヤ人とアラビア人との協調が表面的には至極順調に進んでゐるかの觀を呈し、英國内一部の樂觀論者はかくして多年の痛であつたパレスチナ問題も戦争を機會に解決がつくといふ意見を抱くものすら現はれたが、ここに英政府が突如土地の讓渡を禁止したので、ユダヤ人が一齊に反對したばかりでなく、一方ではアラビア人指導者エルサレム司教グラント・ムフティがその機會を掴んで英國の制限手段が生緩いことを叫び出し、依然双方から英政府攻撃が初まり問題が依然として根深いことを深刻に示した。

英政府が平地に波瀾を起すかのごとき手段を突如とつた最大の理由は、近東の形勢が大戦において日一日と重大化し、アラビア人の同情を確保しておくことが絶対に必要となつたのであるものと見られる。

聯合國は近東に五十萬の兵をおいてゐるが、アラビア人の向背如何により他の回教國との關



係を良くしなければならぬ必要に迫られ、遂にユダヤ人の反対を覚悟の上で思ひ切つてアラビヤ人懐柔に手を出したのであらう。ニューヨーク、ロンドンではユダヤ人が早くも反対運動を初め、パレスチナ自身ではエルサレム、ハイファ等で殺傷事件すら傳へられるが、英國としてはユダヤ人が對獨戦線でまさかドイツにつくわけはなく、たとひ英國へ反感をもつて結局は聯合國に歸つて來るものと見透しをつけてゐることである。

ここで興味あるのはアラビヤ問題と關聯して、伊英關係がどうなるかである。英國がアラビヤを固めるために思ひ切つた手段をとつたことは、イタリアがアラビヤに働きかけることを事前に封じたと見ることも出来る。英國のこのアラビヤ政策の發展、イタリア向け石炭の押收、イタリア新聞のフィンランド攻撃の開始などの一聯の事實を見ればそこに伊英關係の現段階が描かるべくそれがどう發展するかは注目される。

英國の世界統治策

不許複製

昭和十五年三月廿六日印刷  
昭和十五年三月廿九日發行

定價五拾錢

編者 ヨーロッパ問題研究所

東京市麹町區有樂町壹丁目四番地  
ヨーロッパ問題研究所内

發行人 満田 巖

東京市麹町區有樂町壹丁目十四番地

印刷人 中村 伯三

東京市麹町區有樂町壹丁目十四番地

印刷所 株式會社 大參社

東京市京橋區銀座西五丁目五番地  
菊地ビル内

發賣所 世界創造社

電話銀座座 三五四六番  
振替東京 一一六一四二番



# 戦争文化叢書

第1輯 参謀本部課長 高嶋辰彦著  
**日本百年戦争宣言** 定價四十銭  
 送料六銭

戦争文化研究所發行  
 本書は愈々複雑廣汎なる長期戦争の段階に入る支那事變に處するに方り、嶺南世界に類なく仁慈四海に普ねき、我が皇道を宇内に光被せしめ、聖業を眞實し奉るべき理念體系である。  
 今や、全世界は日本を樞軸とする世界維新の百年長期戦に入る。聞け！ 夙に、軍の樞機にある著者の烈々たる愛國の叫びを！

第2輯 清水宣雄著 太平洋問題研究所發行  
**植民地解放論** 定價三十銭  
 送料六銭

被壓迫民族をヨーロッパより解放し、歐米的搾取の原理に代つて、植民地を搾取する代りにその土地を生かし、その民を生かすことによつて、始めて、來るべき世界には近代と全く異なる様相を持ち來すことが出来る。ここにこそすべてにその處を得せしむべき日本の肇國以來の世界政策が存するのである。

第3輯 志田延義著 日本問題研究所發行  
**第八絃一字** 定價三十銭  
 送料六銭

八絃一字の響を聞くこと多く、八絃一字を今日の精神に於て把握し眞にその眞精神を生かすもの甚だ少し。八絃一字の大精神を以て新しき世界秩序を建設しゆくべき大御戦の今や全世界に戦はれつゝあるとき、ここに最も具體的なる大旗が掲げられた！ 本書によりて、その精神は初めて明確に認識される！

第4輯 小島威彦著 ヨーロッパ問題研究所  
**獨伊の世界政策** 定價四十銭  
 送料六銭

獨伊のヨーロッパ再建戦争は、エチオピア戦争より今次のポーランド並にトルコ問題に至つて、一層明瞭に、日本の世界戦争との緊密なる聯國と統一の下に展開されるに至つた。日本の印度進出と獨伊のバルカン政策の呼應こそ、イギリス的近代史への大いなる逆襲でなければならぬ。支那事變ヨーロッパ事變印度事變、日本世界樞軸の世界建設政策をみよ。

第5輯 アジア問題研究所發行  
**支那人は日本人なり** 定價三十銭  
 送料六銭

東亞新秩序の建設とは、果して單に現代の一面の現象的變革にあらずして、まさに日本を根軸とする世界史的轉換である。しかも或は、類廢的敗北主義的西歐的東亞協同體論、さらに單に日支兩民族の對立闘争のみを主張するものあり。この片々たる末期的意識に對しここに敢然として「支那人は日本人なり」として、皇亞統一體を叫ぶ。

第7輯 山本 鏡著 日本問題研究所發行  
**天皇政治** 定價四十銭  
 送料六銭

現代は哲學的時代が嘗つてあつたらうか。現代は偉大な學問が偉大な仕事をなし得べき時代が將來に於てもあり得るであらうか。しかも、現代ほど學問が現實的にその貧困さを暴露してゐる時代が嘗つてあつたらうか。かくて新たな日本諸學の樹立に向つて、最も大いなる建設的大綱が示される

第6輯 丸山熊雄著 映畫文化研究所發行  
**文學戦争** 定價四十銭  
 送料六銭

日本文學は、國民のエネルギーを文學的に組織し、方向づけることによつて、文學としての價値を獲得しなければならぬ。ヨーロッパ的搾取社會によつて歪められた世界像に代へるに、新たな世界像を以てせよ！ かつて一度として戦はざる文學が存在したか。かつて、一度たりと戦はざる文學論があつたか。ここに本書は戦ふ文學の全體系を示さんとす

第8輯 小倉虎治著 アジア問題研究所發行  
**對英戦と被壓迫民族の解放** 定價四十銭  
 送料六銭

被壓迫民族の解放こそ、我が八絃一字の大精神に最も合致するものである。壓迫された諸民族の解放なくしては新しき文化は生れず！ 今や、東洋の被壓迫民族は、自らの解放のために献身の努力を續けつつあり、この自己解放のエネルギーこそ、我が皇道世界化の戦ひに最も大なる力を發揮するであらう。被壓迫民族を我が日本によりて解放せよ！

# 戦争文化叢書



戰 争 文 化 叢 書

第9輯 吉田三郎著 支那問題研究所發行  
東亞とイギリス 定價 四十錢  
送料 六錢

イギリスが東亞に侵略の魔手と差伸べて以來、既に數百年、彼らの東亞に對する認識は、我々の想像を絶してゐる。みよ！その尅大なるアジア研究を。アジア學を。組織的な文化工作のあとを。イギリスに東亞の新事態を認識せしめることは愚かじき限りである。東亞を最もよく知るものはイギリスであり、認識よりもその完全退却こそ最大の急務である。

第10輯 篁實著 支那問題研究所發行  
東亞協同體論を撃つ 定價 四十錢  
送料 六錢

ここに集録された五つの論文は、著者の眞に熱烈な東亞新建設意志によつて、偽購的東亞協同體論の批判を爲したものである。これによつて東亞協同體思想の根本的誤謬、そのイギリスの敵性を中心とする舊世界體制の擁護者としての本質は、亮膚なく暴露されたのである。

第11輯 今藤茂樹著 支那問題研究所發行  
日英支那戦争 定價 四十錢  
送料 六錢

歐洲戦争は日本世界戦争の一翼としてのみ理解されなければならぬ。我々が戦ひつつある支那事變——日英支那戦争こそ、世界維新戦の大導である。日英は支那に戦ひ、ヨーロッパに戦ひ、全アジアに戦ひアメリカ、太平洋、——全世界に戦ひつつあり！

第12輯 滿田巖著 北方問題研究所發行  
日本世界戦争 定價 四十錢  
送料 六錢

明治維新以來の日本戦争こそ、眞に世界戦争の名に値するものであつた。まことに新たな世界史を創造を告げるべき其の建設戦争は、今や、極めて深刻なる様相を呈し來つたのである。本書により、我々がまさに戦ひつつある戦争の本質が的確に認識される。

戰 争 文 化 叢 書

第13輯 波多尙著 日本問題研究所發行  
日本戦争経済試論 定價 四十錢  
送料 六錢

果敢なる皇軍の進撃をして、新東亞建設の原動力たらしめ、世界新秩序の形成の礎石たらしめんには、ひとり剣を執つて戦ふ將兵のみならず、一切の國家的エネルギーを集中しなければならぬ。経済學も亦國家總力戦の精銳なる武器たるべし。因循なる「統制經濟」より「戦争經濟」へ！

第14輯 渡邊誠著 ヨーロッパ問題研究所發行  
ファシズム教育 定價 三十錢  
送料 六錢

ムソリーニ指導下の今日のイタリアが第二次歐洲大戦の方向を決定すべき重要な地位に立ち得るは、ムソリーニが早くよりイタリアの運命を認知し、自己の敵が何であるかを徹底せしめ、自らして祖國の運命開拓を實踐しつゝあるからである。かゝるファシスト・イタリア興隆の歴史を教育の角度より眺めんとした。この著により、はじめて盟邦イタリアの發辣たる教育の全貌は明らかとなる。

第15輯 西谷彌兵衛著 日本問題研究所發行  
日本戦争貨幣論 定價 四十錢  
送料 六錢

日本版ヨーロッパ科學の猖獗こそは我々が撃つべき最初のものでなければならぬ。この誤れる「科學的認識」の下に幾萬の聖靈は空しく大陸の野に散り、興亞の聖戦は人類の不祥事に轉化せしめられんとする！特に、「經濟」の領域にこそ、最も反動的なる言論の横行をみる。意識的なる日本經濟の矮小化・經濟的敗戦論等々——古きヨーロッパの經濟科學を没落せしめよ！

第16輯 中村光著 日本問題研究所發行  
日本史代の建設 定價 四十錢  
送料 六錢

今こそ、世界史は日本史として考へられねばならぬ。従來の片々たる歴史書は總て日本を主體とする世界史の把握をなすことを得ず！ここに、本書は正に來るべき日本の世界に備へて、その建設の理論を果敢に主張する！みよ、本書によりて、新たな「日本史代」の黎明は、明確に我々の前に提示された。



# 戦争文化叢書

**第17輯** 参謀本部附 陸軍少佐 間野俊夫著 戦争文化研究所發行  
**ルーデンドルフの 国家總力戰** 定價 三十錢 送料 六錢

武力戰の成果の完遂は政治、經濟、思想等一切の國民の創造的合意の現實威力にまたねばならぬ。近代戰の性格もまたここに存するのである。この意味において第一次歐洲大戰におけるドイツ慘敗の深刻悲痛なる體驗に基づくルーデンドルフの總力戰觀を平易に説明しその缺陷を指摘補正せる本書は全國民必讀の書である。

**第18輯** 泉 四郎著 航空文化研究所發行  
**世界航空文化闘争** 定價 六十錢 送料 六錢

目次——一、日本航空文化論 二、日本エア・ルート 三、ミュンヘン會議當時に於ける歐洲の空軍情勢 四、イギリスエア・ルート 五、カナダエア・ルート 六、アメリカエア・ルート  
 大戰以來の航空技術の發達は、既に時代を海から空に引上げてしまつた。イギリスを首とする近世文化の象徴たる制海權を越えて、世界制空權を確保せよ

**第19輯** 深尾重光著 科學文化研究所發行  
**科學者は何を爲すべきか** 定價 五十錢 送料 六錢

彼は何を豫期してゐたであらうか。彼を待つてゐた南の海は、冷い霧にこめられた陰鬱なイギリスとは打つて變つて、強い太陽は燦々と降り注ぎ、凡ゆる風物は驚くばかり鮮麗であつた。彼の接するものは、もはや老衰教授の退屈な講義ではなく、潑刺たる大自然そのものであつた。

**第20輯** 堀 一郎著 アジア問題研究所發行  
**印度民族論** 定價 五十錢 送料 六錢

燦然たる古代アジア文化の一として、壯大なる綜合美を以て、世界に開いた古代印度文化を創造したるは、從來ヨーロッパ學者達によつて擁護されたインド・アジア民族ではなくして、太陽民族たるドラヴィダ族であつた。ドラヴィダこそはアジア太平洋文化圏の有力な一員たり、ジャヴァ、スマトラ等南方を通じて日本古代文化と不可分關係にあつた。

# 戦争文化叢書

**第21輯** 清水宣雄著 農村問題研究所發行  
**日本農兵戦争** 定價 五十錢 送料 六錢

近代ヨーロッパ資本主義機構にあつては「土地」は掠奪する以外に「蓄積」することは出来ない。ここにヨーロッパの植民地掠奪の意義があり、ここにヨーロッパ資本主義の脆弱性がある！農村の都會化こそ、農村をしてヨーロッパ植民地化せしめることである。肥料と爆弾！ここに農と工と兵との具體的統一性の表現がある。皇軍の兵士は農民である。この認識こそ世界維新の「力」である！

**第22輯** 伏見猛彌著 日本問題研究所發行  
**教育動員計畫の書** 定價 五十錢 送料 六錢

従來の世界史とは即ち西洋史であつた。歐米人が世界支配を合理化するためにのみ描かれた偽備史であつた。今や、日本を中心とする新しき神話建設の曙の時に當り、青年日本に課せられた使命とは何であらうか、教育は何に全動員されねばならぬだらうか。

**第23輯** 小倉虎治著 アジア問題研究所發行  
**インド解放へ** 定價 五十錢 送料 六錢

皇國日本の世界史的使命が、飽くなき植民地擲取の上に立つ歪曲された西歐的近世世界を否定し、民族と階級の二重の矛盾に苦しむ世界を、皇道に照して救出せんとする日本の世界の建設にある以上、あらゆる不正に彩られた英國の最も醜惡を極めた印度支配の否定は必然である。

**第24輯** 特命全權大使 白鳥敏夫著  
**歐洲を繞る世界情勢** 定價 三十錢 送料 六錢

擲取と掠奪とを原理とするヨーロッパ自身の持つ自己矛盾は、遂に今次の第二次ヨーロッパ大戰へと激化された。日獨伊三國同盟、獨り不可侵條約の眞實、歐洲に於ける世界が如何なる状態にあるか、大空に放つこの巨弾こそ全國民待望の書である。



# 戦争文化叢書

第25輯 ヨーロッパ問題研究所編  
**英國の世界統治策** 定價五十錢  
 送料六錢

英國が世界の海に誇る海軍も、たゞその數量に於てのみ辛うじて世界一の名を保つに過ぎない。陸軍は話の外である。——この徴々たる兵力を以て、日没せざる彼の尅大な領土を維持し得た英國には武力の外に何か策がなければならぬ。彼が世界統治の鐵則「分割支配」とはそも如何なるものか。

第26輯 特命全權大使 白鳥敏夫著  
**歐洲を繞る世界情勢** 定價三十錢  
 送料六錢

ヨーロッパ問題研究所發行  
 搾取と掠奪とを原理とするヨーロッパ自身の持つ自己矛盾は、遂に今次の第二次ヨーロッパ大戦へと激化された。

日獨伊三國同盟、獨ソ不可侵條約の眞實、歐洲に於ける世界が如何なる狀勢にあるか、大空に放つこの巨彈こそ全國民待望の書である。

第27輯 深尾重正著 アジア問題研究所發行  
**印度侵略序幕** 定價七十錢  
 送料六錢

イギリスがこの三百年間世界に君臨し得た所以は實にその植民地の掠奪搾取の賜であつた。イギリスの高い生活も文化も植民地の暴壓と強奪と搾取の上に立つてゐるにすぎない。而してイギリスによつて最も却掠搾取を擅にされたものは印度である。全世界有色民族の徹底的搾取の上に樹立せられたる西歐侵略主義的現狀維持陣營の元兇英國を打倒せよ！

## アジア宣戦

清水宣雄著  
 アジア問題研究所發行  
 定價四六判 二五二頁  
 送料一・五〇  
 〇・一八

何が故にわれらはヨーロッパ文化を變革し、古き文化の傳統に生きるアジアの文化をもつて、新しき世界文化を創らなければならないか？  
 何が故にわれらは、政治的にも、經濟的にも、文化的にも、世界のヨーロッパ的現機構を變革して、世界に新しき様相を持ち來たさなければならぬか？ この新しき世界史の認識のため、今こそアジアの宣戦はなされなければならない。

## 世界戦争論

仲小路彰著  
 日本問題研究所發行  
 菊判 三二八頁  
 定價二・五〇  
 送料〇・一八

戦争は、存在そのものの根源的矛盾に由る一民族、一國家或は國家群の最大最高の全能力・全生命力を集中・凝結せる人類における活動性の最も強力なる發揮といふべく、まさに社會における各領域の全體的聯關の最深なる自己表現である。それは單に平和に對立するものではなく却つて**世界史の劃期的發展を實現するものである**。我々日本人は、今や來るべき世界戦争の世界史的意義を十全に達成するために、この世界全面把握をなすべき「戦争學」の建設を必須とする。此處に**全日本に對して最も創造的なる戦争學を贈る**。



小島 威彦著  
日本問題研究所發行

菊判 二〇八頁  
定價 一・八〇  
送料 〇・一八

## 哲學的世界建設

今や、世界史は日本理念によつて眞實なる闡明をうけ、日本史は新なる世界建設によつて自己の現實的なる表現をもたねばならぬ。今日迄の哲學は悉く西歐の植民地的世界政策に隨伴されたものであつて、眞に日本が新なる世界史的變革の主體となつて、自己の哲學體系を樹立せんとする企圖に至つては、未だ何人によつても試みられたことがない。  
西歐の植民地、アジア、アフリカ、東歐に諸民族の運命を凝視し來つた著者は、今此の輝かしく世界史變革の敢行さるべき日本に歸り來り、其の方向と體系を提出した。

參謀本部課長 高嶋辰彦著  
陸軍歩兵大佐  
戰爭文化研究所發行

菊判 二五〇頁  
定價 二・〇〇  
送料 〇・一八

## 皇戰

皇道總力戰  
世界維新理念命

皇道日本の完成  
荒廢アジアの復興  
欺瞞世界の轉換に關する  
綜合的建設的指標

夙に軍の樞機に在る著者が今次事變の體驗と思索に基き、聖戰即皇戰の意義を明かにし、皇道に即する總力戰遂行の原理を究め、日本世界建設の指標を全世界に明示せる舉世必讀の大文字！

志田 延義著  
日本問題研究所發行

菊判 二〇三頁  
定價 一・六〇  
送料 〇・一八

## 神話篇 日本文學論

新史代の神話篇!!

日本の道義世界建設の神話、日本の歴史的使命遂行を指導する宏大なる神話大系が、現に我等の有つところであるに拘らず、克く之を今日の神話として我等に提示し得た者があつたか。此の我等の不滿を以て著者の不滿とし、日本神話體系の搖ぎなき學的闡明を以て今日の神話を提示したところに、本篇出現の史代的意義が見出される。  
見よ、かつて見るを得ざりし宏大なる今日の神話體系の展示を。

吉田 三郎著  
日本問題研究所發行

菊判 二五〇頁  
定價 一・八〇  
送料 〇・一八

## 日本建設史論

日本戰爭は文化を破壊するものなりや、日本の眞の敵は何處にありや、本書は過去の史論の性格と現代の世界情勢とを闡明しつゝ、これ等の間に對する斷乎たる回答を與へたものである。眞に、國民文化建設の指標と日本史の發展的熱情とを與ふるに足る日本文學、此處に始めて出づ!!  
路傍に石の如き、片々たる國內的史家は既に死せり。今や大なる日本の世界史的躍動は、著者の深き國史の研究を通して、方向を見出し得たのである。



仲小路 彰著  
日本問題研究所發行  
菊判 三〇二頁  
定價 二・五〇  
送料 〇・一八

# 日本精神論

## 根本命題

- 1 日本精神は、それ自らの根源性において、神話による一切の世界精神を生命化し、純粋化する。
- 2 日本精神は、それ自らの發展性において、眞理による日本世界史を實在化し、象徴化する。
- 3 日本精神は、それ自らの主體性において、戦争による日本世界史を現實化し、必然化する。
- 4 日本精神は、それ自らの創造性において、文化による世界民族國家を綜合化し、大和化する。
- 5 日本精神は、それ自らの普遍性において、眞の皇政による世界統一を十全化し、體系化する。
- 6 日本精神は、それ自らの本質性において、皇道宣布による世界完成を壯嚴化し、組織化する。

山本 饒著  
日本問題研究所發行  
菊判 二二三頁  
定價 二・二〇  
送料 〇・一八

# 學の使命

學問とはこれを一般的にそして形式的に規定すれば、直接に現實に與へられた特殊な體驗内容をば、普遍的なものによつて體系的に組織統一するものである。學問の個々の仕事はそれ故に直接に與へられた現實を熟知してをるといふことの外に、この所與をば如何なる普遍によつて、如何なる態度において、體系的に組織統一するかといふことに存する。

— 學のための學、たゞ抽象論理を羅列したに過ぎぬ從來の死學を否定して、眞の學問の方向と内容を明示した劃期的勞作遂に出づ！

東京市橋區銀座座 電話三五五(57) 世界創造社 發賣所 東京市橋區銀座座 電話三五五(57) 世界創造社 發賣所

小島 威彦著

ヨーロッパ問題研究所發行

四六版 二六四頁  
定價 二・四〇  
送料 〇・一五  
一五〇葉

# 喜望峰に立つ

## — アフリカ紀行 —

今、東洋より西洋への喜望峰が、激越なる怒濤のなかにそそり立つた。それは一つの夢であると共に、しかも勇ましい現實である。あまりにも暗く永かりし夜が、あまりにも輝ける曙と共に明けんとする。此の大なる變革の前後にウ・ア・ス・コ・ダ・ガマの路を逆に歩まんことを望む。西から東への道標たりし喜望峰はいま輝かしき希望とともに、東から西への我等の道標たらんとする！

嘗てアジア侵略のために凱歌をあげたヨーロッパ近世の喜望峰は、今や新なる世界創造の喜望峰に轉化した。ヨーロッパ近世の成立と發展を可能ならしめ、その犠牲として重壓せしめられたアジアとアフリカの幾億の民は、その反撃のエネルギーを日本に仰ぎつゝ、新なる世界像の形成に參與せんとする。此の青年史こそ、日本の世界史的解明を要求すると共に、世界の老年史に對する日本的闘争を翹望する。

(近刊豫告)

堀井 實遺稿集

# 哲學の戦ひ

著者堀井氏——<sup>オカムラ</sup>實——は遂に去る一月十九日、三十二歳の生涯を畢つた。數年間直腸癌の重態の床にありながら、今日の日本の危機と苦惱と光輝に於て、自己の全生命を消華し盡したのであつた。此處に集録されたものは、著者がその苦患の裡にあつて、猶ほ黙し得ずして書き續けた歴史と思想の全半である。この書こそ人間生活の全面に亘つて透徹せる魂を傾け盡した人間の永遠化の姿であり、それは直ちに現代の苦惱する日本の最高の藝術化である。一個の人間が、國家そのものの如く苦しみ、その苦しみが恰も新なる世界そのものを意慾するほど徹底した生活——かかる生活の記録こそ、人生のなし得る最高の淨化であり、それは最早や記録といふよりも、寧ろ歴史そのものであるといはねばならぬ。

東京市橋區銀座座 電話三五五(57) 世界創造社 發賣所 東京市橋區銀座座 電話三五五(57) 世界創造社 發賣所



# 世界

世紀の金字塔!!! 未曾有の大著!!!

既刊

- 元寇 人類政治闘争史
- 北清事變
- 歐洲大戰(上) イタリア獨立戦史
- ギェルシア戦争
- 日清戦争(上) 米エニ戦争
- 成吉思汗戦史
- 日清戦争(下) 百年戦争史
- 七年戦争史

戦争文化研究所發行

嘗てホメロスはトロイの戦勝を「イリアス」に歌つて新興ギリシアの民族的自覺を興へ、大ベルシヤの侵入に打勝ち、またシーザーは彼の「ゴール戦史」を著してローマ帝國の世界的統一を實現し、シエクスピアは、その戯曲に幾多の戦争を描いて、エリザベス王國をして無敵艦隊を破らしめ、コルネイユの詩劇はフランスを文化の覇たらしめ、シルレルの「三十年戦史」はドイツ統一の大いなる力となり、更に東洋にありては、インドの叙事詩「マハラバタ」支那の「史記」はすべて民族發展の大象徴化であり、さらに日本戦史と云ふべき「日本外史」は始めて新しき日本の熱情の國民的精神を呼びさまして維新の大業を實現し得たのである。かくて世界史的任務を果さんとする日本は、こゝに日本精神の眞に生ける「日本戦史」によつて肇國の理想、犠牲的意志、武士道精神の本質的捕捉をなし「東洋戦史」にあつては、自然的政治的變遷の盛衰興亡の根源を辿り、さらに「西洋戦史」によつて經濟的科學的進展と技術による勝敗の重要性を考へ、こゝに日本民族としての高邁なる理想を情熱的に表現すべきである。特に青年こそは!

仲小路彰著

# 興廢大戦史

全百卷 國民版

近刊 西洋史 歐洲大戰 (中ノ四)

二十世紀の世界大戰は全地球の戦争であつた。民族主義と海外植民地の争闘、さらに三國同盟と三國協商との對立は、遂にバルカン問題によつて大戰へと激化された。以來、戦線の擴大は殆んど全歐にまたがり、アジアもまたこの戦渦に入る。白耳義の蹂躪、マルヌの激戦、タンネンベルクの戦、ヴェルダン血戦、さらにジュートランドの大海戦、ロシアのソヴエト革命、ドイツ潜水艦の活動、アメリカの参戦、遂にドイツの國內革命による崩壊、こゝに休戦に入り、ヴェルサイユ條約となり、國際聯盟が結ばれたが、今、再び刻々不安と險惡の時代に入り、第二次歐洲大戰はすでに勃發せるとき我々は、心をひそめて大戰の全貌を知らねばならぬ。

豫約募集  
申込金不要  
内見本呈  
五圓拾錢  
二冊定價  
六圓  
市内  
六圓  
地方  
四圓  
外埠  
四圓  
郵料  
四圓  
送外  
四圓  
本美製上判菊裁體

分責自由

發賣所

東京市京橋區銀座西五ノ五 菊地ビル内

世界創造社

電話銀座(7)三五四六番  
振替口座東京一一六一四二番



751
255



751  
255

世界創造社

¥.50



